

緒言

本書は、哲學館にて、已れ文學史を講述するに就き、館生の參考書  
 として、編ぜしなり。さるは文學の定義、起原、および歌文發達の理  
 論を、**人々の**觀察によりて、ともかくも論斷すべく、又漢字の  
 傳來、假名の創定、學校の興廢等より、歌仙、文人の傳記、逸聞、さては  
 歌文の上には、あらはれし、儒學、佛說、政治、風俗等の影響の如きは、口  
 述に任せても、ありぬべけれど、唯、古來幾多の書中、諸種諸體の歌  
 文に至りては、一々に、其のあるやうを説き盡し難し。且は歌調、文  
 體、句法、語格の、時代によりて、沿革せる事の如きは、所詮、口述のみ  
 にては、かなふ可からず。能くその歌文に就きて、こゝの節、かしく  
 の筋と、指示する所あるにあらずば、其の風姿の變遷を、會得せし

めんと難かる可し。曾て此の事を、館主井上ぬしに語りしに、ぬし  
も、けにとて、深く思ふ所ありけなりし、が、遂に哲學書院と謀りて、  
さる料の書を出版せんと企て、一は館生のためにし、一は廣く世  
間の需要に供して、今より、文學史を編述せん人には、材料となり、  
文學史を講習せん人には、参考ともならしめんとて、已れにこれ  
が編集を囑せり。已れ今更に、いなむべき辭なくて、諾ひたるもの  
から、常いそがはしき身なれば、おほかたは、館員佐村八郎ぬしに  
誂へて、かれこれの書を抄録せしめ、校字の幾分をさへに委ねた  
れば、本書は、多くぬしの助力によりて成れる。

本書に載せたる歌文は、すべて種類によりて聚め、時代によりて  
分ち、時代と種類とに就きて、總論めくものを記し、歌にも文にも、

作者のこと、編撰の由來、あるは古來の定評などを掲げて、解題め  
くものを書きそへつ。かゝれば、文學史を講ぜんとする教師諸君  
は、生徒をして、本書に就きて歌文を讀ましめ、文學上の理論、歴史  
上特殊の事跡等を、口述にせられなは、便宜なる方もあらむ。  
歌文の長きを、憚らず載せたるは、餘りに節略しては、其の真相妙  
趣を會得しがたければなり。

文章の數いと多きは、講讀の料にも充てんの、心構へありてなり。  
されは、單に文學史を講究せんとする人は、適宜に、各種の文一二  
篇つゝを撰びて、教へもし、習ひもすべし。

短歌今様の類は、長歌文章などゝ異なりて、幾首にても、即坐にか  
きて示さんと、容易なれば、わざと例證を省きたり。彼此繁簡不倫

なりと怪しむことなかれ。

明治廿七年四月

編者志るす

歴代文學目次梗概

第一篇 太古の文學

太古の歌總十四首……………一

第二篇 上古の文學

上古の文……………十二

新室壽詞……………十三

法隆寺藥師佛光背銘文……………十四

天壽國曼陀羅繡帳首段の文……………十五

祝詞 二章……………十六

古事記 三節……………二十三

風土記 二節……………二十八

宣命文 二章……………三十一

上古の歌 {長歌二十九首}……………三十七

{短歌二十九首}

目次

第三篇 中古の文學

中古の文……………七十四

物語文……………七十五

竹取物語 二節……………七十六

伊勢物語 四節……………八十八

源氏物語 四節……………九十六

序文……………百二十七

古今和歌集……………百二十八

大堰川行幸和歌序……………百三十八

庚申夜奉和歌序……………百四十

高陽院行幸和歌序……………百四十二

後拾遺集和歌序……………百四十四

日記文……………百五十一

土佐日記 四節……………百五十二

紫式部日記 二節……………百六十一

更科日記 三節……………百六十七

草子文……………百七十三

枕草子 六節……………百七十四

史傳文……………百九十一

榮花物語 二節……………百九十二

大鏡 二節……………二百

今鏡 二節……………二百十五

今昔物語 二章……………二百二十六

消息文 七章……………二百三十六

中古の歌 長歌七首……………二百四十五

古今和歌集〔短歌數十首〕  
〔旋頭歌數十首〕……………二百六十三

後撰和歌集短歌數首……………二百七十二

拾遺和歌集短歌數首……………二百七十五

後拾遺和歌集短歌數首……………二百七十九  
 金葉和歌集〔短歌數首〕……………二百八十一  
 〔連歌數首〕……………二百八十五  
 詞花和歌集短歌數首……………二百八十七  
 千載和歌集短歌數首……………二百八十七  
 今様歌數首……………二百九十一  
 以上

# 歴代文學

關根正直編

## 第一篇 太古の文學

### 太古の歌



とて太古といふは神代と稱する時より推古天皇の御世の頃までを志か定  
 めつゝるは漢學佛教の感化を享けず純然たる我が國の文學の萌芽せし時期  
 なればなり。初此の間に現はれし文學はいかなるものぞといふに上代いまだ  
 文學の用なかりし頃には言詞の外に文學なし。この言語を婉曲流麗に云ひな  
 して燦然章を成せるもの、一は歌と云ひ、又一は文と名つけたり。

いづれの國の文學も歌まづ起りて文これに次ぐといふ。蓋し歌は人の胸裏に  
 集積する喜怒哀樂の感情を訴ふる詞にして、人に感情あり言語ありし上は、自  
 づから歌ありけむと疑ふべくもあらず。唯此の歌といふもの、常の言語と異な

太古の文學

る所は詞勢ももしろく句調うるはしく、諷詠に堪ふべくして、聴く者の感動を深からしむるに在り。まか詞句の流暢婉曲なるは、自然と口吟するに便にして、記臆し易し。これ太古の歌の消滅せずして、後世に傳誦せらるゝ所以なり。

歌の起原は、紀貫之朝臣既にこれを云へり。古今集の序に、此の歌、あめ地の開け始まりける時より出来にけり。然はあれども、世に傳はることは、ひさ方の天にしては、下照姫に始まり、あら金の地にしては、素盞鳴尊よりぞ起りける。ちはやふる神代には、歌の文字も定まらず。すなほにして、言の意わきがたかりけらし。人の世となりて、素盞鳴尊よりぞ、三十文字あまり一文字はよみける。とあれば、爰にまづこの二歌を抄出して示すべし。

(一)下照姫の歌は、其の夫、天若彦の歿せし時、姫の兄なる味相高彦根神、來訪らはれしを、亡き天若彦と、容姿の似たるより、天若彦の父ら見過ちて、手足に取りつきたりければ、我が兄なる由を顯はさんとして、下照姫のよみたるなり。その歌、  
あめなるや　をどたなはたの　うながせる　玉のみすまるとみ  
すまるとみ　あなたまはや　みたに　ふたわたらす　味相高彦

根の神ぞや

(二)素盞鳴尊のは、尊櫛稻田姫を娶り、相住まん料に、須賀宮を造り給ひし時、其處より雲立昇りけるを、よませ給へるにて、後世の短歌の調へは、こゝに始めて定まれり。

やくもだつ　いづも八重垣　つまごめに　八重垣造る　その  
八重垣を

(三)人の世となりては、第一に神武天皇の御製をぞ出すべき。始めのは、天皇、兄磯城を討給へる時、皇軍疲れなやみければ、將師の心を慰めんとして、よませ給ひしなり。

たゝなめて　いなさの山の　木の間ゆも　いゆき守らひ　戦  
へは　われはやえぬ　洲つ鳥　鵜飼がども　今すけに來ね  
みづくし　久米の子らが　粟生には　香薺ひともと　そね

がもと そねめ繁きて 討ちてしやまむ  
みづくし 久米の子らが 垣下かきくだに 植うゑしはじかみ 口くちひ  
びく われば忘れず 討ちてしやまむ

(五)同し御代に、道臣命の歌あり。そは命、天皇の密旨を承り、偽りて虜と和し、忍城しのしろの窟に會飲せんとし、豫て我が猛卒と契りけらく。酒酣なる頃、我れまづ歌はん。歌ひをばらば、一時に起ちて虜を討ちぬとて、虜の酔ひたるを見て、歌ひあげしなり。

おさかの 大窟屋おほほらやに 人さばに 入り居りとも 人さばに來  
入り居りとも みづくし久米の子らが かぶつゝい 石つ  
つい持ちて 討ちてしやまむ

當時代の歌は、おほかた句節長きが行はれて、三十一音なる短歌は、極めて稀なりき。扱、此の長句節の歌も、世の進み行くに隨ひ、やうく巧みになりて、或は詞を疊み句を對し、自然と韻脚さへ備へたりげに見ゆ。

(六)景行天皇の御時、皇子日本武尊、東夷を征服し給ひて、歸り上り給ふ道にて、御惱

おこりけるを、強ひて伊勢國小津の崎まで到り着かせ給ひしに、御下向の時、此處の松蔭に、御太刀を置き遺れ給ひけるが、今も、さながらとまりけるを御覽して、よませ給へる歌あり、自然と對句となりたる所、又自然と韻の押されたる所など、心得易からむ様に記さん。

尾張おとわに 直對なほむかひへる小津の崎なる

ひとつ松あはれ

ひとつ松 ひとにありせば 太刀佩たてひけましき

きぬ着せましき

ひとつ松あはれ

(七)神功皇后攝政の御時、忍熊王叛きぬ。竹内宿禰討手として向ひしに、王の軍中に、熊凝といへる一猛士、聲高に歌ひけらく。

をち方の 荒ら松原

松原に渡り行きて 槻弓にまり矢をたぐへ

貴人は 貴人どち  
 賤奴は 賤奴どち いざ戦はな 我れは  
 たまきはる 内の朝臣が 腹内は 砂石あれや

いざ戦はな 我れは

〔八〕應神天皇崩御の際、皇太子菟道稚郎子、御兄大鷦鷯尊と互に御位を譲りあひ給ひし程に、太子の皇庶兄大山守皇子、其の隙を伺ひ、太子を弑して世を奪はんと構へたり。大鷦鷯尊かくと知らして、太子に告げ参らせしかば、太子軍を起し、大山守皇子をたばかりて、宇治の川に沈め給ひしが、且は父帝の亡き御魂を想ひ奉り、且は太子の妃は皇子の妹にてさへあれば、彼れ是れおぼしむづらひ給ひて、よませ給へる。

ちはや人 宇治の渡りに

渡り出に 立てる 梓弓

眞弓

射きらむと心はもへど  
 射とらむと心はもへど 本べは君を思ひ出  
 末べは妹を思ひ出  
 いらなけく そこに思ひ  
 かなしけく ころに思ひ 射きらずぞ來る 梓弓

眞弓

〔九〕雄略天皇は、折々荒らかなる御振舞の打雜りけるやう、史には見えなれど、又事に觸れて情深き御心もまし／＼ければ、よませ給へる御歌の中にも、いと優にみやひかなるあり。いとせ河上の小野に獵し給ひけるに、菟飛び來て、御臂をくひつゝ、惡しとおぼす程に、蜻蛉又飛來て、其の處を噛ひ去りぬ。天皇蜻蛉を愛でおぼして、群臣に、此の蜻蛉を賞むる歌よめと、仰せけるに、誰れも得よまさりしかば、御製

大和の 小村の嶽に 鹿臥すと 誰れか此の事 大前に白す



大君はそこを聞かして たま纏たまづなの胡床こしどに立たし

まづ纏たまづなの胡床こしどにたし

鹿かまつと あがいませは

小猪こぶたまつと あがたしせは たこむらに 蟲搔むしをかきつぎつ

其の蟲むしを 蜻蜒せみはや齧かひ かくのごと 名なにおはんと 空からみ

つ大和の國やまとのくにを 蜻蜒せみ洲すといふ

(十)天皇また、さる國に出まして、そこに菜を摘める、少女を御覽し、戯れに、のたまひ  
かけさせ給ひし御歌、

かたまもよ みかたま持ち

ふらしもよ みふらし持ち 此の岡おかに菜摘なづみます子

家のらへ

名告なつこさね 空からみつ大和の國やまとのくには 押おなべて 我れこそ居ゐれ

敷しきなべて 我れこそ坐ませ

我れこそは

夫おとことは告つらめ 家いへをも

名なをも

(十一)又この天皇、猪名部の真根といふ工匠の、御心になはぬ事ありて、殺さんと  
し給ひしに、同じ工人のひとり、が真根の技術を惜しみてよめる、

あたらしき 猪名部いのなべなくみみが かけし墨繩すみづな

志こころがなけは 誰たれれかかけんよ あたら墨繩すみづな

天皇之を聞しめし悔いて、急ぎ御使を、甲斐の黒駒に乗せて、真根を刑せんとす  
る所に遣りて、赦さしめ給ひつといふ。

右の歌は旋頭歌とて、常の短歌三十一音歌にもあらず、長歌にもあらず、一種の  
歌なり。まづ五音に歌ひおこし、次に七音、また七音とつらぬ、それを打返して、又五  
七七と連ぬるをいふ。かくて此の旋頭歌には、多くは韻脚備はれり。大よそ上代

は、思ひ餘りあるまゝには、自然と長くも歌ひて、數十句を連ねるが多けれど、稀にはかゝる體の歌もあり、されど三十一音なる(短歌)は、中にも勝れて程よく整ひ、其の調しらべよき所あればにや。後世は、その體のみぞ、多く行はれける。

(十二)されは此の時代にも、此の體の歌數ある中に、允恭天皇の皇妃衣通姫、ある夕天皇を戀ひしのびてよめる、

我がせこが來べき宵よなり さゝがはの

蜘蛛のおこなひ こよひしるしも

(十三)天皇聞しめしめで、歌ひ給はく

さゝらがた 錦の紐を ときさけて

あまたは寐ずと 唯一夜ののみ

(十四)翌日天皇、井傍の櫻花を御覽し、姫を思してよませ給へる、

花らばし 櫻のめで ことめでは

早くはめです あひめづるこら

これらの御製を、上の「やくもだつ」の御歌に比べ見よ、情こころも濃やかた、詞もやさしく、聞ゆること、いかばかりぞ。そは扱措き、當時の歌の句法、五音より起りて七音となる事、短歌のみならず、長歌も旋頭歌もすべて然り。猶この後の歌の姿は、次の時代に至りて掲げん。

### 第二篇 上古の文學

#### 上古の文

上古とは、推古天皇の御世より、奈良朝時代の末に涉り、光仁天皇の御世を終ふる迄を云ふ。さるは是れより先漢學入り佛教來り、共にやう／＼海内に弘まりつゝ、推古天皇以後に至りては、其れらの影響によりて、文物制度大に整ひ、歌のみならず、諸體の國文も、世に多く現はれぬ。則ち銘文、壽詞、祝詞、宣命文、史傳文の類なりき。是れらの文體は、多く句節を整へ、詞調うるはしく、志なして、歌のすがたに類似したるは、全く口傳相承の古風に依りて、目に見るよりも、耳にて聞く方を旨としたればなりけむ。純粹の散文の發達せし事、案外に遅々たりしは、一方に漢學の流行せしと、用字の不便なりしとに因れるならむ。

そも／＼推古天皇の朝には、既<sup>ハ</sup>う正しき漢文をかゝれし人あり、入唐留學せし者も多かりき。天智天皇の朝以後、學校の設けありて、ひたすら漢學を獎勵せられ、詔勅を始め、法典史書の類に至る迄、大かた公式のものは、皆漢文にかゝれし

からに、國文を用ふるは、僅に古風を存する料にぞ止まりける。されば學者多くは漢文かゝんどこそ勤めたれ。國文を顧るは、いと稀なりき。かくて當時は、又いまだ假名といふものあらず。記録はすべて漢字を用ひられしなるが、其の用法は、音訓雜へ列ねて、我が國語の筋を、辛うして寫し出でたるものならむ。然のみならず、於是<sup>ニ</sup>如此<sup>カ</sup>などやうの顛讀文句をも、便宜に挿入したりけん事、つぎ／＼に鈔録する、文例を見て知るべし。畢竟するに、當時はなほ、歌の時代といふべきなり。文章すこぶる世に現れたりと雖、完全なる域に進みしは、假名創定以後の、中古時代に至りてなりけり。

#### ◎新室壽詞

此の壽詞<sup>ユキ</sup>は、詞のまゝを漢字を假りて、記したるものなり。扱壽詞<sup>ユキ</sup>とは、吉言の義にて、神代よりの古事を述べ、又事物を贊稱する類を云ふ。此<sup>ニ</sup>のは、顯宗天皇、仁賢天皇と播磨國なる、縮見屯倉、首の家、の僅となりておはせし時、其の頃の風俗にて、新に家を建てたる時は、必、親交の人を招きて宴會し、座上の人、次第を以て歌舞する例なりければ、顯宗天皇も此の宴に列り、來目部、小楯の彈ける琴の音に

合して、誦し給ひし室齋むろさわの詞なり。此の詞、日本書紀に載せたるが、後世の作とは見えず。必古傳を寫し書きたるものと思はるれば、或は太古時代のものとも見做すべし。是れ我が國、散文の濫觴とも云ふべくや。

築立ツクリタテ稚室ワカム葛根カヅネ。築立柱ツクリタテ者。此家長御心コノチチノミヤノココロ之鎖也。取舉棟梁ツクリタテ者。此家長御心コノチチノミヤノココロ之林也。取置椽ツクリタテ者。此家長御心コノチチノミヤノココロ之齊也。取置蘆葦ツクリタテ者。此家長御心コノチチノミヤノココロ之平也。取結繩ツクリタテ葛者。此家長御心コノチチノミヤノココロ之堅也。取葦草ツクリタテ者。此家長御心コノチチノミヤノココロ之餘也。出雲者新墾ツクリタテ。新墾之十握ツクリタテ稻之穗。於淺甕ツクリタテ釀酒。美飲ツクリタテ。嗟哉吾子等。脚日木ツクリタテ。此傍山壯鹿之角ツクリタテ。舉而吾儔者。旨酒ツクリタテ。餌香市。不以直買ツクリタテ。手掌ツクリタテ。亮拍上賜ツクリタテ。吾常世等ツクリタテ。

◎法隆寺藥師佛光背の銘

此の文は、我國の言詞を漢字に寫して、文をなせるもの、最も古きにて、今年明治廿七年を距ること、千二百八十七年、即推古天皇十五年の作に係る。大和法隆寺の金堂なる、藥師佛光背の銘なり。訓點は小中村博士の附けられたるに従ふ。

池邊大宮治天下天皇イケノヘノオホミヤノシメツクシノミコト。天皇大御身勞賜時ミコトノオホミヤノミコト。歲次丙午年ノボヒノトシノトシ。元明召於大王ノボヒノトシノトシ。天皇與太子ミコトノオホミヤノミコト。而誓願賜我大御病大平欲坐故ミコトノオホミヤノミコト。將造寺藥師像ミコトノオホミヤノミコト。作仕奉詔然當時崩賜造不堪者ミコトノオホミヤノミコト。小治田大宮治天下大王天皇ミコトノオホミヤノミコト。及東宮聖王ミコトノオホミヤノミコト。大命受賜而歲次丁卯年ミコトノオホミヤノミコト。十五年仕奉ミコトノオホミヤノミコト。

◎天壽國曼陀羅繡帳の首段

この文も、大和國法隆寺の内なる、中宮寺と云へる尼寺の、天壽國曼陀羅繡帳の初段を抄出したるなり。即推古天皇の廿九年、聖德太子薨去の年、その追福にて作らせ給ひしものにて、法隆寺藥師佛光背の銘よりは、十五年後の文なり。

斯歸斯麻宮治天下天皇名阿米久爾シノキニシマノミヤノシメツクシノミコトノナミ。爾意斯波留支比里爾ニルイシハシヒリニル。波乃彌已ハノミヤミ。等ト。天飲娶アメノミヤミ。奇大臣名伊奈米之足キニシメノミヤミ。尼女名吉多斯比彌乃彌已ニメノミヤミ。等ト。爲ト。大后生名多至波奈等已比乃彌已等オホノミヤミ。天用妹名等已彌居加斯支移アメノミヤミ。比彌乃彌已等ヒノミヤミ。推古ミコトノオホミヤノミコト。

◎祝詞

當代に於きて、國風に書き下せる文章の、最古きは、祝詞に及くものぞなき。祝詞は、告説言の意にて多く神明に禱白す詞なり。されは、只管言詞を修飾し、枕辭をまじへ、對句を構へて、聲調のうるはしからむとを勉め、朗誦するに滔々として、澁滞する事なく、神にもませ、人にもあれ。聽く程の者、感動すばかりに作爲せし也。故に其の躰、やゝ長歌のすがたに似たり。是れ一は古來の風俗たる、口誦相傳の爲にもあるべし。

祝詞は、もと太古よりの言詞ならめど、幾分かは改せられしものならむ。其中に、出雲國造神賀詞、祈年祭詞、大殿詞、大殿祭詞など、古きものとて、詞うるはしく、調古雅なり。左に載せたる出雲國神賀詞は、天皇御代しろしめす始めに當り、例として出雲國造參内し、神代の故事を白して、御代を祝へる詞なり。加茂真淵翁の説に、此の祝詞式に載せたる祝詞どもの中に、類ひなく古き文なるを思ふに、舒明天皇の、飛鳥岡本宮の頃の文にやあらむ。清見原の宮、天武天皇の朝までは下らじ。云々、此の神賀詞は、上つ代より口つから唱へ傳へし文ありしを、世

移り人の心薄くなりて、違ひ行きつらむを、岡本宮の頃に、今の如くは書きつらむ。其の時、古の言に、時の言も交はりつらむと、覺ゆる由もありと云へり。

次に載せたる大殿祭の詞は、皇宮建築の時に、神に祈白したる詞にて、神武天皇の御時より、既く唱へ傳へ來しを、後に聊改剛したるにもやあらむ。これも加茂翁の説に、其の意と言とは、上つ代のまゝとも云ふべけれど、聯ねかきしは、藤原宮(持統天皇の朝)の頃の躰なり。それが上に、親王諸王とかきしをも見よ。皇子を親王とかき、二世より王と書き、オホキミと云ふは、彼の頃よりの事にて、古は然はいはざりしなり。とも云へれば、此の二つを、上古の部についでつ。

(一)出雲國造神賀詞。生日能足日爾

八十日波在毛今日能生日能足日爾出雲國造姓名恐美恐毛  
申賜久掛毛久畏岐明御神止大八鳴國所知食須天皇乃大御世乎  
手長能大御世止齋止加若後齋時者爲氏出雲國乃青垣山内爾下津  
石根爾宮柱太敷立氏高天原爾千木高知坐須伊射那伎乃日眞名

子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神乎始天  
百八十六社坐皇神等乎某甲我弱肩爾太襪取掛天伊都幣能緒結  
天乃美賀秘冠天利伊豆能眞屋爾麓草乎伊豆能席登荊敷天伊都幣  
黒益之天能厯和爾齋詐母利氏志都宮爾志靜米仕奉氏朝日能豊  
榮登爾伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜登波久奏高天能神王高御魂  
神魂命能皇御孫命爾天下大八嶋國乎事避奉之時出雲臣等我遠  
祖天穗比命乎國體見爾遣時爾天能八重雲乎押別氏天翔國翔氏  
天下乎見廻氏返事申給久豊葦原乃水穗國波畫波如五月蠅水沸  
支夜波如火益光神在利石根木立青水沫毛事問天荒國在利然毛  
鎮平天皇御孫命爾安國止平久所知坐乎止申氏已命兒天夷鳥命  
爾布都怒志命乎副天降遣天荒留神等乎撥平氣國作之大神毛  
媚鎮天大八島國現事顯事令事避支乃大穴持命乃申給久皇御孫

命乃靜坐牟大倭國申天已命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛  
慈玉命登名乎稱天大御和乃神奈備能坐已命乃御子阿遲須伎高  
孫根乃命乃御魂乎葛木乃嶋能神奈備爾坐事代主命能御魂乎字  
奈提爾坐賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐天皇御孫命  
能近守神登貢置天八百丹杵築宮爾靜坐支是爾親神魯伎神魯美  
命宣久汝天穗比命波天皇命能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波  
比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閉奉登仰賜志次乃隨爾供齋時若後齋  
後仕奉氏朝日乃豊榮登爾神乃禮自利臣能禮自登御禱乃神寶獻  
登其久奏白玉能大御白髮坐赤玉能御阿加良毘坐青玉能水江玉乃  
行相爾明御神登大八嶋國所知食天皇命能手長大御世乎御橫刀  
廣爾誅堅米白御馬能前足爪後足爪踏立事波大宮能内外御門柱  
乎上津石根爾踏堅米下津石根爾踏凝立振立流事波耳能彌高爾

天下平所知食牟事志太米白鵠乃生御調能玩物登倭文能大御心  
 毛多親爾彼方能古川席此方能古川席爾生立若水沼間能彌若叡  
 爾御若叡坐須々伎振遠止美乃水乃彌乎知爾御袁知坐麻蘇比乃  
 大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能已登久明御神能大八嶋國  
 乎天地日月等共爾安久平久知行牟事能志太米止御禱神寶乎擊  
 特氏神禮自利臣禮自登恐彌恐毛彌天津次能神賀吉詞白賜登奏

此の文に限りてかく抄し、は、祝詞の書式を示さむがためなり。次なるは、唯讀み易からむやうをはかりて、

(二) 大殿祭詞

高天原に神づまります、皇親神魯企神魯美之命以ちて、皇御孫之  
 尊を天津高御座に坐さしめて、天つ璽の鏡劍を捧持ち賜ひて、言  
 壽ぎ宣りたまはく、皇我が宇都乃御子、皇御孫之命、此の天津高御

座に天津日嗣を万千秋の長秋に、大八洲豊葦原の瑞穂之國を、安  
 國と平けく所知食と、言寄さし奉り賜ひて、天津御量り以ちて、事  
 問ひし磐根木根立ち、草の可岐葉をも言止めて、天降り玉ひし食  
 國天下と、天津日嗣所知食、皇御孫之命の御殿を、今奥山の大峽小  
 峽に立てる木を、齋部の齋斧を以ちて伐り採りて、本末をば山の  
 神に祭りて、中間を持ち出で来て、齋鉏を以ちて齋柱を立て、皇  
 御孫之命の天之御翳と造り仕へ奉れる、瑞の御殿を、汝屋船の命  
 に、天津奇護言を言壽き鎮め白さく。此れの敷坐大宮地は、底津磐  
 根の極み、下津綱根、波府蟲の禍無く、高天原は青雲の靄く極み、天  
 の血垂り飛鳥の禍ひ無く、堀り堅めたる柱桁梁戸牖の錯動き鳴  
 る事無く、引結へる葛目の緩び、取り葺ける草の噪き無く、御床都  
 比の佐夜伎夜女の伊須々伎、伊豆都志伎事無く、平けく護り奉る

神の御名を白く。屋船久々能運命。屋船豊宇氣姫命御名を稱へ奉りて皇御孫命の御世を堅磐に常磐に護ひ奉り五十櫃御世の足らし御世に。田永の御世と福へ奉るに依りて齋玉作等が持齋まはり持淨まはり造り仕へ奉れる瑞八尺瓊の御吹きの五百都御統の玉に明和幣、曜和幣を附けて齋部宿禰某が弱肩に大襦取り懸けて言壽ぎ鎮め奉る事の漏落む事をは神直日命大直日命聞直し見直して平らけく安らけく所知食と白す。詞別白く。大宮賣命と御名を申す事は、皇御孫命の同じ殿の裏に塞り座し、参入り罷出る人の選び所知食し神等の伊須呂許比阿禮比ますを言直し和しまして、皇御孫の命の朝の御膳、夕の御膳仕へ奉る、比禮懸件緒襤懸る件緒を手の躡足の躡爲さしめずて、親王諸王諸臣百官人等を己が乖々在らしめず、邪意穢心無く、官進めに進め、官

勤めに勤めしめて、咎過在んをは、見直し聞直しまして、平らけく安らけく、仕へ奉らじめますに依りて、大宮賣命と御名を稱へ辭竟へ奉らくと白す。

◎古事記の文

古事記は、天武天皇の勅を承りて、稗田阿禮が年來誦習記憶せし所を、元明天皇の和銅年間に至り、太安萬侶といふ碩學の、更に勅を奉じて、阿禮に就き其の誦する古説を撰録せしものにて、我が國天地開闢より、推古天皇の御世に至るまでの歴史なり。されは中には、太古以來口傳のまゝを、文に綴りし所も多かあり。當時はいまだ假名の創定なかりし頃なれば、之を記録するに當り、安萬侶の苦心は實に評すべきやうなし。其の委しきこと、又本書修撰の由來は、安萬侶が自序の文中に述べたり。言長ければこゝには引かず。扱初段一節は、古事記の書法を知らせんために、原書のまゝに抄したるなり。

(一)卷首の文



天地初發之時於高天原成神名天之御中主神次高御產巢日神次  
神產巢日神此三柱神者並獨神成坐而隱身也次國稚如浮脂而久  
羅下那洲多陀用幣琉之時如葦牙因萌騰之物而成神名宇麻神阿  
斯訶備比古遲神次天之常立神此二柱神亦獨神成坐而隱身也

(二)天神盟誓の段

次に建速須佐之男命に詔給はく汝命は海原をしらせと事依し  
給ひき故各々依さし給へる命の隨に知ろしめす中に速須佐之  
男命所命給へる國を知らずて八拳須心前に至るまで啼いさち  
き其の泣給ふ狀は青山を枯山なす泣からし河海は悉に泣乾し  
き是を以て惡る神の音なひ狹蠅なす皆涌き萬の物の妖ひ悉に  
發りき故伊邪那岐大御神速須佐之男命に詔給はく何由以汝者  
事依せる國を知らずて哭いさちると詔給へは答し給はく僕は

妣の國根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭くと申給ひき爾伊  
邪那岐大御神大く忿怒して然らば汝此の國にはな住そと詔給  
ひて乃神夜良比爾夜良比賜ひき故其伊邪那岐大神者淡海の多  
賀になも坐ます故於是速須佐之男命の言給はく然者天照大御  
神に請して罷なむと申給ひて乃ち天に參上ります時に山川悉  
に動み國土皆震りき爾天照大御神聞驚かして我那勢の命の上  
り來ます由は必善しき心ならじ我國を奪はむと欲すにこそと  
詔給ひて即御髮を解き御美豆羅に纏かして左右の御美豆羅に  
も御鬘にも左右の御手にも各八尺勾璫の五百津の美須麻流の  
珠を纏持して曾毘良には千入之鞆を負ひ五百人之鞆を付け亦  
伊都の竹柄を取佩して弓腹振立て堅庭は向股に踏那豆美沫雪  
なす蹶散して伊都の男建踏建て待問給はく何故上り來ませる

と問給ひき。爾速須佐之男命の答白く、僕者邪心なし、唯大御神の命以て、僕が哭伊佐知流事を問給ひし故に、白つらく、僕は妣の國に往らむと欲ひて、哭くと申し、かは、爾大御神、汝者此の國には不在と。詔給ひて、神夜良比夜良比賜ふ故に、罷往なむとする状を申さむと欲ひてこそ、參上りつれ。異心なしと申給へば、爾天照大御神然者、汝の心の清明は、何以知まし。と詔給ひき。於是速須佐之男命、各宇氣比て子生など答給ふ。

(三) 稻羽の素菟の條

此の大國主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆國は大國主の神に避りまつりき。避りまつりし所以は、其の八十神各々、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に、帑を貢せ、從者として率て往き、於是氣多の前に到りける時

に、裸なる菟伏せり。八十神其の菟に言ひけらく、汝將爲は、此の海鹽を浴み、風の吹に當りて、高山の尾上に伏てよと云ふ。故其の菟八十神の教ふる從にして伏き、爾其の鹽乾く隨に、其の身の皮悉に風に吹拆し、故に、痛みて泣伏れは、最後に來ませる大穴牟遲神、其の菟を見て、何由汝泣伏ると問給ふに、菟答言、僕游岐島に在て、此地に度らまく欲つれども、度らむ因なかりし故に、海の和邇を欺きて言ひけらく、吾と汝と族の多き少きを競てむ。故汝者、其の族の在の悉率て來て、此の島より氣多の前まで、皆列伏し度れ。吾其の上を踏みて走りつゝ、讀度らむ。於是吾族と孰れ多きと云ふ事を知らむ。か言ひしかは、見欺て列伏りし時に、吾其の上を踏みて讀度り來て、今地に下むとする時に、吾汝は我に見欺つと言竟れは、即最端に伏せる和邇、我を捕へて、悉に我衣服を剝き。此に

因りて泣き患ひしかは、先だちて行まし、八十神の命以て、海鹽を浴て風に當り伏れと誨給ひき。故教の如せしかは我が身悉に傷えつと告す。於是大穴牟遲神、其の菟に教へ告はく、今急此の水門に往きて、水以て汝身を洗ひて、即其の水門の蒲黃を取て、敷散して、其の上に輾轉ては、汝身本の膚の如、必差なむものぞと教給ひき。故教の如爲しかは、其の身本の如くなりき。此稻羽の素菟と云ふ者なり。今に菟神と名もいふ。故其の菟大穴牟遲神に白さく。此の八十神者、必八上比賣を得給はじ。帛を負給へれども、汝命ぞ獲給ひなむと白しき。

◎風土記の文

元明天皇の和調六年五月甲子、畿内七道の諸國に制して、郡郷の名、好字を著し、其の郡内に生ずるところの、銀銅彩色草木禽獸魚蟲等の物、具に色目を録し、及

び土地の沃瘠山川原野の名號の由るところ、又古老相傳ふる舊聞異事、史籍に載せて奉らしめし由、舊史に見えたり。其の中にて出雲風土記は、卷末に天平五年二月三十日之れを勘定すとあるを見れば、天平五年は元明天皇の諸國風土記の撰進を仰せられし和銅六年よりは、廿一年後なり。此の前後、諸國よりあまた風土記を奉りけむを、出雲風土記兩卷のみ全く今日に残りて、その餘は大かた亡佚せり。風土記は大かた漢文跡にかゝれたるが、古老の口碑舊聞は、古傳のまゝを國文に記されたるが、珍らしきなり。

(一)出雲風土記中國引の故事

所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、八雲立出雲國者、狹布之稚國在哉、初國小所作、故將作縫詔而拷衾志羅紀乃三崎矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而童女曾鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黑葛聞々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米支豆支

乃御崎也此而堅立加志者石見國與出雲國之堺有名佐比賣山是也亦持引綱者藺之長濱是也亦北門佐伎之國矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女曾鋸所取而波多須々支穗振別而三自之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自手波縫之打支太衝別而波多須々支穗振別而三自之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自手波縫之打絕而聞見之國是也示高志之都々乃三崎矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女曾鋸所取而波多須々支穗振別而三自之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者自手波縫之打而三自之綱打挂而霜黑葛聞々耶々爾河船之毛々曾々呂々爾國々來々引來縫國者三穗之崎也持引綱者夜見島是也固堅立加志

者有伯耆國大神岳是也今者國引訖詔而意宇杜爾御杖衝立而意惠登詔故云意宇

(二)日向風土記中知鋪郷の條

日杵郡内知鋪郷天津彦火瓊々杵尊離天磐座排天八重雲稜威之道別道別而天降於日向之高千穗二上峰時天暗冥晝夜不別人物失道物色難別於茲有土蜘蛛名曰大鉗小鉗二人奏言皇孫尊以尊御手拔稻千穗爲紉投散四方必得開晴于時如大鉗等所奏搯千穗稻爲紉投散即天開晴日月照光因曰高千穗二上峰後人改號智鋪

◎宣命文

宣命とは、皇命を宣告する意にて、國語にかける詔勅を然名づく。そも、當時は、大かたの詔旨を漢文にて書かるゝ習ひなりしが、さすが又、言詞を以て宣告する、古風をも廢せられず。西宮記に、詔勅宣命の事を辨じて、臨時之大事爲詔、尋常之小事爲勅と云ひ、又宣命、事神社山陵、告文、立后、立太子、任大臣、節會云々及喪

家、告文類也。と云へり。詔勅の辨は、いかゞに思はるれど、宣命とは、全く右に云へる如くならむ。愚按ずるに、國家の大政に關する事は、大かた漢文にかきて詔勅と稱し、皇室の内政に關する御事は、皆國文に、かきて、宣命と稱せしが如し。扱始に出せる文は、文武天皇の、持統天皇より讓を受け、即位し給ひし時、群臣に宣告せしめし文にして、今を距る事、凡千二百年前のものなり。凡べて宣命の文、體は、祝詞の如く、詞勢句調を流麗圓滑にせしも、聽者を感動せしめんが爲なり。けり。其の書式も、祝詞の如く、漢字のみを用ひて、天仁遠波を其側に小書せしなり。

未に載せたるは、寶龜二年二月左大臣藤原永手の、薨しける時、光仁天皇甚だ痛惜し給ひ、勅使をもて其の家に贈らせ給ひし、吊賻の詔旨にして、前のよりは、凡七十年後の文なり。詞句殊にうるはしく、能く大御心の哀悼を、寫し出でたるものなれば、こゝに掲ぐ。

宣命の作者は、何人なるか知られざれども、當初は中務省なる大内記が、撰するを職とせり。後中古の世に、文章博士の職となりし頃には、佛語漢語など多くま

じへ書きて、詞調も、うるはしからずなりけり。

(一)文武天皇即位の宣命文

現御神と、大八島國所知天皇大命らまと詔り給ふ大詔を、集侍皇子等王臣百官人等、天下公民諸聞し食さへと詔る。高天原に事始めて、遠天皇祖御世、中今に至るまでに、天皇御子之あれまさん彌繼々に、大八島國知らさむ次ぎてと、天津神の御子ながらも、天にます神のよさしまつりしまに、聞とし看し來る此の天津日嗣高御座之業と、現御神と、大八島國所知、倭根子天皇命、授け賜ひ負せ賜ふ、貴き高き廣き厚き大命を、受け賜はり恐こみまして、此の食す國天の下を調へ賜ひ、平らけ賜ひ、天の下の公民を惠み賜ひ撫で賜むと、なも、神ながら思ほしめさくと詔り給ふ、天皇大命を諸々聞とし食せと詔る。是を以て、百官人等四方の食國を治

め奉ると任せ賜へる國々の宰等に至るまでに、天皇か朝廷の敷  
き賜ひ、行ひ賜へる國法を、過ち犯すことなく、明き淨き直き誠の  
心を以ちて、御稱稱て緩み怠る事無く、務結て仕へ奉れと詔り給  
ふ、大命を諸々聞とし食さへと詔る。故此の狀を聞とし食し悟り  
て歎しく仕へ奉らん人は、其仕へ奉れらん狀のまに、品々讚  
め賜ひ治め賜はんものぞと詔り賜ふ、天皇、大命を諸々聞とし食  
へと詔る。

(二)光仁天皇、左大臣永手を吊ひ給ふ宣命文

藤原の左大臣に詔り給ふ、大命を宣る。大命にませ詔り給はく。大  
臣、明日は參出來仕へむと待ひ賜ふ間に、休まりて參出ます事は  
無くして、天皇か朝を置いて罷退ますと聞とし看して思ふさく、於  
與豆禮かも多波許止をかも云ふ、信にし有らは、仕へ奉りし大政

官之政をは誰に任さしも罷りいます。孰れに授けかも罷りいま  
す。恨めしきかも悲しきかも。朕、大臣誰にかも我語ひさけむ。誰に  
かも我問ひさけむと、悔しき惜しき痛み酸み大御泣哭しますと  
詔り給ふ、大命を宣る。悔しかも惜しかも今日よりは大臣の奏し  
の政は聞とし食さずや成らむ。明日よりは大臣の仕奉りし儀は  
看行はさずや成らむ。日月累り往くまに、悲しきことのみし  
彌々起るべきかも。歳時積り往くまに、淋しきことのみし彌  
々増るべきかも。朕、大臣春秋麗はしき色をは、誰と俱にかも見行  
し弄び賜はむ。山川の淨き所は、孰と俱にかも見行しあからへ賜  
むと歎き玉ひ憂ひ賜ひ、大ましますと詔り給ふ、大命を宣る。美麻  
之大臣の萬政總以て怠り緩む事なく曲け傾くることなく、王臣  
等をも彼此別心なく、普く平けく奏さひ公民之上をも廣く厚く

慈みて奏さひし事此のみにあらず。天皇朝を暫の間も罷出で、  
 休ふ事なく、食國之政のよくあるべきさま、天下の公民の休まる  
 べき事を、旦夕夜日と云はず思ひ議り奏ひ仕へ奉れば、欺しみ明  
 らけみ、おだひしみたのもしみ、思ほしつゝ大まします間に、忽ち  
 朕が朝を離りて罷りましぬれば、言はむすべもなく、せんすべも  
 しらに、悔しび賜ひわび賜ひ、大ましますと詔り給ふ大命を宣る。  
 又事別けて詔り給はく、仕へ奉りし事廣み、みまし大臣の家の内  
 の子等をもはふり賜はず失ひ賜はず、慈み賜はむ、温ね賜はむ、顧  
 み賜はむ。美麻之大臣の罷道もうしろ軽く、心もおだひに念ひて、  
 平けく罷りとほらすべしと、詔り給ふ大命を宣る。

上古の歌

當時代の歌の様を案ずるに、推古天皇の時は、さして前時代と異なる點も見え

ざれど、舒明天皇の頃よりぞ、やうく言詞も雅に移り、句調もうるはしくなれ  
 りける。此の後、奈良朝の頃までの、歌の風姿を知らむには、萬葉集に及くものな  
 し。萬葉集は、我が國歌集といふもの、始にて、廿卷あり。此の集の成れる由を  
 らく述べんに、編者は右大臣橘諸兄公なりと、古書に見えたり。然れども、公薨  
 後の歌をも載せられたれば、全部を公の撰集なりとは定め難し。近古以後の説に、初  
 めの部分こそ、諸兄公の撰集なりけめど、完成に至らざる程に、薨せられしを、後  
 大伴家持卿更に増補編成せられしならむといふげに、本集の中に、同じき歌の  
 前後に重出するもの凡四十餘首に及べるを見ても、一人の手に成りしものな  
 らぬと知られたり。

萬葉といふ書名の出據は、仙覺法師の説に、文選顔延年が曲水詩の序に、貽統固  
 萬葉とある註の、葉、代也とあるを執りて、萬代に遺すべき書の意なりとし、契沖  
 阿闍梨は、史記魏世家の註文に萬葉也、左傳云萬盈數也、葉歌義也、釋名云人聲云  
 歌、々柯也、如草木有柯葉也とあるを本とし、季吟法印は、又これによりて萬葉と  
 は、よろづの言の葉といふ義ならむとも云へり。兎に角に、當時は何事も唐風に

倣はれし世なりしかば、漢籍の文辭を本據として、名つけしならむ。

編者諸兄公も家持卿も、共に奈良朝時代の、人なりしかど、本集の中には雄略天皇の御製を始めとして、淳仁天皇の朝に至るまで、凡三百年間に涉れる、貴賤男女の詠歌を集め、其の數凡四千五百十餘首を載せたり。是れらの歌を、性質より區別して雜歌、相聞、挽歌、譬喻、四季の五類とせり。相聞とは、君臣父子兄弟夫婦朋友の間の相思の情を謠ひしもの、又互に贈答せし歌の類をいふ。挽歌とは、漢土にて貴人の死亡せし時輻車を挽きつゝ、歌へるを挽歌といへるに據り、後の哀傷の歌を、かく云へりぞ。又譬喻とは、事に寄せ物に譬へて、情思を述べたる歌をいふ。

此の頃は、いまだ假名の創造せられざりし時なれば、本集の歌は總べて漢字を以て記されたる中に、音のみを假りたるあり。或は訓に據りたるあり。葎を「六倉」とかき、躑躅を「管土」とかける類、毫も字義を顧みざるあり。又若草に「春草」の字を充て、秋山に「金山」の字をかき、網を「留鳥」とかき、煙を「火氣」とかける類の、全く義のみをかりて、音にも訓にも據らざるあり。殊にをかしきは、「の音に」蜂音とかき、

「し」の假字に、「二」とかき、猪を「十六」とかき、出を「山上復有山」とかける類、わざと戯れにかけるもありて、編者が意匠と、漢字の使用に自在にして、巧妙なりし事とを見るべし。これを萬葉書法といふ。その一例を示さん。

金野乃美艸苺屋杼禮里之兔道乃宮子能借五百磯所念  
旦覆日之入去者御立之島爾下座而嘆鶴鴨

是れにて本集の書法を推想すべし。扱立返り、本集に載せたる、舒明天皇の御製を始め、其の後の歌ども、次を逐ひて掲げ行かむ。

(一)舒明天皇香具山に登りて國見志給ひし時よませ給へる長歌

大和には むら山あれど 取りよるふ 天の香具山 登りた  
ち 國見をすれば 國はらは煙たちたつ  
海はらは鷗たちたつうまし國ぞあきつ島

大和の國は



(二)同天皇内野に遊獵し給ひし時皇女中皇子のよみて奉れる

安みしよ わが大君の あしたには 取撫でたまひ

ゆふべには い寄立たしよ

御執らしの 梓の弓の なか弭の音すなり

朝獵に 今たよすらし

夕獵に 今たよすらし

御執らしの 梓の弓の なか弭の音すなり

反歌

たまきはる内の大野に馬なべて朝ふますらむその草深野

此の反歌といへるものは、是れより以前の長歌には、添ひたる例を見ず。木村氏の説に、漢土にて賦の末に、一篇の括りを述べたるものありて、之を荀子に反辭といふ。荀子の楊倞注に、反辭、反覆叙説之辭猶楚辭亂曰といへり。本邦の反歌は、全く是れに擬したるなり。そは此の方の長歌は、彼の國の賦の如きものなればな

り既に本集卷十七には、長歌を賦と記したるものあるをや、又同卷に家持卿の池主に贈りたる文の後に、詩一首と短歌二首とを載せて、式ヲ擬亂といへり。そも推古天皇の時より、何事も隋唐の風をまねびうつされたる事なれば、長歌を賦に擬し反辭にも倣ひて反歌といふをも、作り設けたるなるべしといへり。(三)天智天皇の御時、中臣鎌足に詔して、春山の花の艶と、秋山の紅葉の彩といづれかまされるそて、言はしめ給ひし時、額田女王の歌もてことわり給ひける、

冬ごもり 春さりくれは 鳴かざりし 鳥も來鳴きぬ

咲かざりし 花も咲けれど

山をまみ 入りても取らず

草ふかみ 手折りても見ず 秋山の木の葉を見ては

紅づきは 取りてぞまのふ

青きをば 置きてぞなけく そこし面白し秋山われは

(四)天武天皇崩御の後、皇后、後、持統天皇の嘆きしのばせ給ひける、

安み志よ わが大君の 夕されは 召し給ふらし

明くれは 問ひ給ふらし 神岳の

山の紅葉を 今日もかも 問ひ給はまし

明日もかも 召し給はまし その山を ふりさ

け見つよ 夕されは あやにかなしみ

明くれは うらさびくらし 荒妙の 衣の袖は

乾る時もなし

此の御世には、歌の神とも聖とも、崇め稱へらるゝ、柿本、人麿朝臣の出てたる時にして、和歌極盛の境に入りしなり。人麿に次ぎて、山部、赤人顯はれたり。此の赤人はた歌の聖と仰がれて、人麿と並ひ稱せられし事は、貫之朝臣が古今集の序に「かの御時に、ちほきみつの位、柿本、人麿なん歌の聖なりける。中略又山部、赤人といふ人あり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たんとかたく、赤

人は人麿が下に立たん事かたくなむありける。と云はれしにても知るべし。それより引續き、山上憶良、大伴家持、高市、連蟲麿、大伴家持など、尤衆に傑出せり。是れらの人々の歌ども、迭に優劣なきにあらねど、概しては風姿雄々しく、句調勢ひあり、細かにも哀れにも、厚くも豊かにもありて、前にも類なく、後も企て及ぶまじきなり。今まづ人麿の歌より云はん。

柿本、人麿は天武持統兩朝に仕へし人にて、始め新田部高市諸皇子の舍人などにもなり、壬申の御軍にも従ひけん。晚年國司となりて、石見に在りきとは知らるれども、精しき履歴は記せるものなし。其の歌多かる中の一つ、

(五)近江の荒れたる都を過ぎし時よめる

人 麿

玉だすき 畝傍の山の 櫃原の ひじりの御世ゆ あれまし

よ 神のことと づがの木の いやつきくに 天の下

知ろしめしよを 空に見つ 大和おきて あをによし 奈良

山をこえ いかさまに 思ほしめせか 天さかる ひなには

あれど いはゞしの 近江のくにの さしなみの 大津の宮  
に 天の下 志ろしめしけむ すめろぎの 神の御事の 大  
宮は こゝと聞けども 大殿は こゝと云へども 春くさの  
志けくおひたる 霞たつ 春日のきれる もしききの 大  
宮どころ 見れば悲しも

反歌

さしなみの 滋賀の辛崎 さきくあれど  
大宮人の 船まちなねつ  
さしなみの 滋賀のおほわだ よどむとも  
昔の人に またも逢はめやも

(この歌より書き方を改め引續けて寫せるは、徒に紙數の増加せんとを慮りて  
なり。詞を重ねもし疊みもまたる所又對句になれる、又おのづから押韻したる

如き所など、上にかける歌どもの例に準じて心得られよ。以下の歌も)

(六)石見國より妻に別れて上り來し時の歌

人 磨

石見のみ つぬの浦まを 浦なしと 人こそ見らめ 瀉なし  
と 人こそ見らめ よしるやし うらはなけども よしるや  
し 瀉はなけども いさなとり うなびをさして 和田津の  
ありそのうへに かあをなる 玉藻おきつも 朝はふる  
風こそよせめ 夕をふる 波こそきよれ 波のむた かより  
かくより 玉藻なす よりねしいもを 露霜の おきてしく  
れは この道の やそ隈ごどに よろづたび かへりみすれ  
ど 彌遠に 里はさかりぬ いや高に 山も越えきぬ 夏草  
の 思ひ志なえて 志ぬおらむ いもが門みむ なびけこの  
山

反歌

石見のや たかつの山の 木のまより  
 わがふる袖を いも見つらむか  
 笹の葉は みやまもさやに さわけども  
 わればいもおもふ 別れ來ぬれば

〔七〕明日香皇女のきのへのあらしきの時よめる

人 麿

とふとりのの あすかのかはの かみつせに いはゞしわたし  
 志もつせに うちはしわたし いはゞしに おひなびける  
 たまもゝぞ たゆればおふる うちはしに おひをゝれる  
 かはもゝぞ かるればはゆる なにしかも 我がおほきみ  
 の 立たすれば たまものごとく ころふせば かはものご  
 とく なびかひし よろしき君し 朝みやを わすれたまふ

か 夕みやを そむきたまふか うつそみと 思ひし時に  
 はるべは 花折りかざし 秋立ては もみぢはかざし 志き  
 たへの 袖たづさはり かゞみなす 見れどもあかず もち  
 づきの いやめづらしみ おもほしゝ 君とをりゝ いで  
 まして あそびたまひし みけむかふ きのべの宮を どこ  
 みやと さだめたまひて あぢさはふ めごともたえぬ 志  
 がれかも あやにかなしみ ぬえとりの かたこひづま 朝  
 鳥の かよはすきみが なつくさの おもひしなえて ゆふ  
 つゝの かゆきかくゆき 大舟の たゆたふ見れば おもひ  
 やるゝ ころもあらず そこゆゑに せんすべもなみ おど  
 のみも なのみもたえず あめつちの いやとほながく 志  
 ぬびゆかむ みなにかゝせる あすかがは よろずよまでに

はしけやし わが大ほ君の かたみにこゝを

あすか川 しがらみわたし せかませは

ながるゝ水も のどにかあらまし

あすか川 あすだに見んと おもへやも

わがおほ君の みなわすれせぬ

(八吉備津の采女がみまかれる後によめる歌)

人麿

あき山の 志たふるいも なよ竹の とをよる子らは いか

さまに 思ひをれか たくづぬの 長きいのちを 露こそは

朝におきて 夕にはきゆといへ 霧こそは ゆふべにたち

て 朝にはうすといへ あづさゆみ 音きくわれも ほの見

し ことくやしきを 志きたへの 手枕まきて つるぎたち

身にそへぬけん わかくさの そのつまの子は さおしみ

か 思ひてぬらむ くやしみか 思ひ戀ふらん 時ならず

過ぎにし子等が 朝露のごとや 夕霧のごとや

(九高市皇子尊城上の殯宮の時よめる)

人麿

かけまくも ゆゝしきかも いはまくも あやにかしとき

あすかの まがみの原に ひさかたの 天つ御門を かしこ

くも 定めたまひて かんさふと いはがくれます やすみ

しゝ 我が大君の きとしめす そどものくにの まきたつ

不破山越えて こまつるぎ わさみが原の かり宮に あも

りいまして 天の下 治めたまひ をすゑにを 定めたまふ

と 鳥がなく あづまの國の みいくさを 徴したまひて

子ながら まけたまへは 大御身に 太刀とりおほし 大御  
 手に 弓とりもたし みいくさを あともひたまひ とよの  
 ふる つゞみの音は いかづちの 聲ときくまで 吹きなせ  
 る ぐだの音も あだ見たる 虎かほゆると もろ人の お  
 びゆるまでに さよけたる 旗のなびきは 冬でもり 春さ  
 りくれは ぬごどに つきてある火の 風のむた なびける  
 ごどく とりもてる ゆはずのさわぎ みゆきふる 冬の林  
 に あらしかも いまきわたると おもふまで きよのかし  
 こく ひきはなつ 矢の志けよく 大雪の 亂れてきたれ  
 まつろをす 立ち向ひしも 露志もの けなほけぬべく 行  
 く鳥の 争ふはしに わたらひの 齋の宮ゆ 神風に いふ  
 きまどはし 天雲を 日のめもみせず とこやみに おほひ

たまひて 定めてし みづほのくにを かなながら ふとし  
 きまして やすみしよ 我が大君の 天の下 まをし給へは  
 よろづ世に 志かしもあらむと ゆふはなの 榮ゆるとき  
 に わが大君 御子の御門を 神宮に よそひまつりて つ  
 かはし、 みかどの人も 白妙の あさごろもきて 埴安の  
 みかどの原に あかねさす 日のくるよまで 志よじもの  
 いはひふしう、 うはたまの ゆふべになれは 大殿を  
 ぶりさけ見つよ うづらなす いはひもとほり さもらへど  
 さもらひかねて 春鳥の さまよひぬれは なげきも い  
 まだすぎぬに おもひも いまだつきねは ことさへく  
 だらの原ゆ かんはふり はふりいまして あさもよし 城  
 上の宮を とこみやと 定めまつりて かむながら 鎮りま

しぬ 志かれども わが大君の よろづよと おもほしめし  
て 造らしし かなやまの宮 よろづ世に すきむともへや  
あめのごと ふりさけみつゝ たまだすき かけてしぬは  
む かしこかれども

反歌

ひさかたの あめまらしぬる 君ゆゑに

月日もまらに こひわたるかも

そにやすの 池のつゝみの こもりぬの

ゆくへをまらに 舍人はまどふ

山部宿禰赤人の傳は詳ならぬぞ、人麿よりは時代おくれ、聖武天皇の頃を年の壯りにて歴たる人と思はる。此の人、柿本朝臣に亞ぎたる歌の上手なりし事は、上に云へり。なほ大伴家持が書牘萬葉集十七に載すにも、幼年未還山柿之門

裁歌之趣詞失乎藝林云々などあれば、古くより人麿と並び稱せられしなり。中にも赤人は、短歌に秀逸多しといふ。扱ふの長短のすかたは、

(十)不盡山を望みてよめる

赤人

あめつちの 別れし時ゆ 神さびて 高くたふとき 駿河な  
る ふじの高根を 天の原 ふりさけ見れば わたる日の  
影もかくろひ てる月の 光もみえず 白雲も いゆきは  
かり ときじくぞ 雪はふりける 語りつぎ いひつぎゆか  
ん ふじの高根は

反歌

たごの浦ゆ うちいでし見れば ましろにぞ

ふじの高根に 雪はふりける

(十一)神龜元年甲子冬十月五日紀伊國に幸せし時の歌 赤人  
やすみまゝ わが大君の こと宮と 仕へまつれる さひが

ぬゆ そがひに見ゆる 沖つ島 清き渚に 風ふけは 白波  
さわぎ 汐ひれは 玉藻かりつゝ 神代より 志かぞたふと  
き 玉つしま山

反歌

沖つしま ありその玉藻 志ほひ満ち  
いかくろひなは おもほえんかも  
わかぬ浦に 汐みち來れば 濁をなみ  
あしべをさして 田鶴なきわたる

(十二神岳に登りてよめる)

赤人

みもろの かみなび山に 五百枝さし 志ゞに生ひたる つ  
がの木の いや繼ぎくゝに 玉かつら 絶ゆることなく あ  
りつゝも やまず通はむ あすかの 古き都は 山高み 河

遠きろし はる日には 山し見かほし 秋の夜は 河しさや  
けし 朝雲にたづは亂れて 夕霧に蛙はさはら 見ること  
ねのみし泣かゆ いにしへ思へは

反歌

あすか川 かばよどさらず 立つ霧の  
おもひ過るべき 戀にあらなくに

(十三題しらす)

赤人

やすみしゝ 我大君の かむながら たかしらしぬる 稻見  
野の 大海の原の あらたへの 藤井の浦に しびつると  
海士船さわぎ 汐やくと 人ぞさはなる うらをよみ うべ  
も釣りはず 濱をよみ うべも汐やく ありがよひ みます  
もしるし きよきしらはま



反歌

おきつ波 へなみまづけみ いさりすと

藤井のうらに ふねぞさわける

いなみ野の あさぢおしなみ さぬる夜の

けながくあれば 家しまぬはゆ

山上、臣憶良は、文武元明元正の三朝に歴事せし人にて、大寶元年粟田真人に従ひて唐朝に使し、靈龜二年伯耆守となり、後又筑前守となりぬ。次に掲ぐる貧窮問答の歌は、親しく我が治下の細民の状況を観て、感ずる所あり、朝廷宰臣をして、地方疲弊の様を知らしめんために、作りたるものにてや。そは、元皇老五年正月、從五位下山上憶良等、退朝之後、令侍東宮焉。と史に見えれば、晩年に至り、聖武天皇の東宮にましくしに、侍候の官となれりと見ゆ。憶良元來漢學に長じ、其の詠歌は、道義彝倫を宣揚するもの多く、短歌の辭はた氣慨あり。

(十四)子どもを思ふ歌

憶良

瓜はめは 子どもおもほゆ 栗はめは ましてしぬほゆ い  
づくより 來たりしものぞ まながひに もとなかよりて  
やすいしなさぬ

白がねも ことがねも玉も なにせむに

まされるたから 子にしかめやも

(十五)惑へる情を反せしむる歌

憶良

人あり。父母を敬ふ事を知らずして、侍養を忘れ、妻子を顧みざる事、脱履より軽くし、みづから異俗先生と稱す。意氣青雲の上に揚ると雖、身體なほ塵俗の中にあり。いまだ修行得道の聖に驗あらず。蓋、山澤亡命の民なり。故に三綱を指示し、更に五教を開き、之に遺るに歌を以てして、其の惑を反せしむ。歌に曰はく。(原漢文)

父母を みれば辱し めと見れば めらしうつくし 世の中  
 は かくぞことわり もちどりの かよらはしもよ ゆくへ  
 しらねは」 うけつづを 脱ぎつるごとく 踏みぬきて 行く  
 ちふ人は 石木より なりてし人か なが名のらさぬ」 天ゆ  
 かは ながまにく 土ならは 大君います この照らす 日  
 月の下は 天雲の つかおすきはみ たにふしの さわたる  
 きはみ きこしをす 國のまほらぞ かにかくに ほしきま  
 にく 然にはあらじか  
 ひさかたの 天路はとほし なほくくに  
 家にかへりて なりをしまさる

〔十六貧窮問答の歌〕

懐良

風まじり 雨のふる夜の 雨まじり 雪のふる夜は すべも

なく 寒くしあれは かたしほを とりつゞしろひ 漕湯酒  
 うちすゝろひて しはぶかひ はなひしくくに 志かどあ  
 らぬ 鬚かきなでよ あれをおきて 人はあらじと ほころ  
 へど 寒くしあれは 麻おすま ひきかゝより 布かたぎぬ  
 ありのことと 着そへども 寒きよすらを われよりも  
 貧しき人の 父母は 飢ゑさむからん めことどもは こひ  
 てなくらむ この時は いかにしつゝか なが世はわたる」  
 天つちは 廣しといへど あがためは せくやなりぬる 日  
 月は あかしといへど あがためは 照りやたまはぬ 人皆  
 か われのみかしかる わくらはに 人とはあるを 人なみ  
 に あれもなれるを 綿もなき 布かたぎぬの みるのごと  
 わけさがれる かゝふのみ 肩にうちかけ 伏菴の ま

けいほのうちけ　ひたつちけ　藁ときしきて　父母は　枕の  
 かたに　めこどもは　あとのべけ　かくみるて　愁へさまよ  
 ひ　かまごけは　煙りふきたてず　こしきには　蛛のすかき  
 て　いひかしら　こどもわすれて　ぬえ鳥の　のどよびをる  
 に　いとのきて　短きものを　ばしきると　いへるがごとく  
 志もとゝる　さをさが聲は　ねやどまて　きたちよはひ  
 ぬ　かくばかり　すべなきものが　世の中のみち  
 世の中を　うしとやさしと　思へども  
 とびたちかねつ　鳥にしあらねば

大伴宿禰家持は、聖武天皇の天平年中より仕官し、孝謙淳仁稱徳光仁の四朝を  
 歴て、桓武天皇御世の始までは、永らへ居たる人なり。家持は祖父安磨も父旅人  
 も、從二位大納言までなりし人なれば、豪家の子として、まづ内舍人に擧げられ、

上下の覺えも斜ならず、次第に高き官爵を累ねて、遂に從三位中納言まで至れ  
 り。家も武衛の筋なりしかば、其の職分を忘れじ、家聲を墜さじと勉められし  
 事、其歌の上にも顯はれたり。此の人歿後、大伴繼人といふ者、族人藤原種繼を殺  
 し、事に連坐して、官職を奪がれしが、後又倭者の讒言によりし事、明らかにな  
 りて、官位本に復せられたり。さて萬葉集卷廿の末に、天平寶字三年、此の卿のよ  
 まれし歌を載せて終られたるが、其の年より、此の卿の薨せし延暦四年まで、凡  
 廿六年なり。この久しき間には、此の卿の歌なほ必多かりけむを、別に編集せし  
 人もなかりしからに、はふれ失せて傳はらざるは、いと惜しむべき事どもなり。  
 〔十七陸奥國より金を出し、詔書を賀する歌〕　家持

あし原の　みづほの國を　天降り　志らしめしける　すめろ  
 ぎの　神のみこと　御世かさね　天の日嗣と　志らしくる  
 君のみよく　志きませる　四方の國には　山川を　廣み  
 あつみと　たてまつる　貢ぎたからは　かぞへえず　盡しも

かねつ 志かれども 我が大君の もろ人を いさなひたま  
ひ よきことを 初めたまひて くがねかも たのしげくあ  
らんと おもほして 志たなやますに 鳥がなく あづまの  
國の みちのくの をたなる山に くかねありと 申したま  
へれ 御心を あきらめたまひ あめつちの 神あひうづな  
ひ すめろぎの みたまたすけて 遠き世に かよりしこと  
を わが御代に あらばしてあれば みをすゑには 榮えむ  
ものと 神ながら おもほしめして ものふの やそども  
のを まつろへの むけのまに 老いびども 女のお  
らばこも 志がねがふ 心だらひに 撫でたまひ 治めたま  
へは ことをしも あやにたふとみ 嬉れしけく いやし思  
ひて 大伴の 遠の神おやの その名をは 大來目主と お

ひもちて 仕へしつかさ 海ゆかは みつくかはね 山ゆか  
は 草むすかはね 大君の へにこそ死なめ かへりみは  
せじとことだて ますらをの 清きそのなを いにしへよ  
今のをつゝに ながさへる おやの子どもぞ 大伴と 佐伯  
のうちば 人つおやの 立つることだて 人の子は 親の名  
たゝず 大君に まつろふものと いひつける ことのつか  
さぞ 梓弓 手にとりもちて 劍大刀 腰にとりばき 朝守  
り 夕のまもりは 大君の 御門の守り 我れをおきて ま  
た人はあらじと いやたて 思ひしまさる 大君の みこと  
のさきを 聞けばたふとみ

反歌三首

ますらをの心おもほゆ大君の

みことこのさきをきけはたふとみ

大伴の 遠つ神祖の おくつきは

志るくしめたて 人の志るべく

すめろぎの 御世榮えんど あづまなる

みちのく山に くかね花咲く

〔千八亡せたる妾を傷む歌〕

家持

吾が宿に 花ぞ咲きたる そを見れど 心もゆかず はしき

やし 妹がありせば 見かもなす ふたり並びる 手折りて

も 見せましもものを うつせみの 假れる身なれば 露霜の

消ぬるが如く 足引の 山路をさして 入り日なす 隠り

にしかは そともふに 胸こそ痛め いひもかね 名つけも

知らに あともなき 世の中なれば せんすべもなし

反歌

時はしも いつもあらむと 心いたく

いにしわきもか はく子をおきて

いてゞ行く 道知らませは かねてより

妹をとゞめん 關をおかましを

妹が見し 宿に花さく 時は經ぬ

わが泣くなみだ いまだひなくに

かくのみに ありけるものを 妹もわれも

千歳のごとも 頼みたりける

〔千九族を諭す歌〕

家持

久方の 天の戸ひらき 高千穂の 嶽にあもりし すめろぎ

の 神の御代より はじ弓を たにぎりもたし まかごやを

たはさみそへて 大來目の ますらたけをよ さきにたて  
 ゆぎとりおほせ 山河を いはねさくみて ふみとほり  
 國まぎしつゝ 千はやふる 神をことむけ まつろへぬ 人  
 をもやはし はき清め つかへまつりて あきつしま やま  
 どの國の 櫃原の 敵火の宮に みやはしら ふとしりたて  
 天の下 しらしめしける すめろぎの 天の日嗣と つ  
 ぎてくる 君のみよく かくさはぬ あかきころを す  
 のらべに きはめつくして つかへくる 親のつかさと こ  
 とたてよ さづけたまへる うみの子の いやつぎくに  
 見る人の 語りつぎてよ きく人の 鏡にせんを あたらし  
 き 清きその名ぞ おほろかに 心おもひて むなごとも  
 おやの名たつな 大伴の うちと名におへる ますらをの友

反歌

しきしまの やまどの國に あきらけき  
 名よおふ伴のを こころつとめよ  
 つるぎ太刀 いやよとふべし いにしへゆ  
 さやけくおひて 來にしその名ぞ

二十難波の宮に幸す時よめる

金村

おしてゐる 難波の國は あしがきの ふりぬるさと、 人皆  
 の 思ひやみて つれもなく ありし間に うみをなす な  
 がらの宮に まきはしら ふとたかしきて をすべにを 治  
 め玉へは おきつどり あぢふのはらに ものよふの やそ  
 どものきを いほりして みやことなれり たびにはあれど  
 も

反歌

あまをよめ、たなしをよね　こぎつらし

たびのやどりけ　かぢのときこゆ

(廿一)入唐使におくる歌

金村

たまたすき　かけぬ時なく　いきのをに　わがもふきみは  
うつせみの　よの人なれば　大君の　みことかしこみ　ゆふ  
されば　たづがつまよふ　なにはがた　みつのさきより　お  
ほふねに　まかぢしゝぬき　白波の　高きあるみき　島づた  
ひ　いわかれゆかほ　とゞまれる　われはぬさむけ　いはひ  
つゝ　君をはまたむ　はやかへりませ

是れより短歌のすがたを示さん

(廿二)舒明天皇の御製

夕されは、小倉の山に、鳴く鹿の、こよひは鳴かず、いねにけらしも。

(廿三)持統天皇の御製

春過ぎて、夏來たるらし。まろたへの、衣ほしたり。あめのからやま、

(廿四)元明天皇の御製

ますらをの、輛の音すなり。ものゝふの、大前つぎみ、楯たつらしも。

(廿五)元正天皇の御製

はたすゝき、尾花さかふき黒木もて、造れる家は、よろづ代までに、

(廿六)聖武天皇の御製

いもにこひ、あごの松原見わたせは、潮干の瀉に、たづ鳴きわたる。

(廿七)題しらす

厚見王

かばづ啼く、神なび川にかけ見えて、今や咲くらむ。やまぶきの花、

(廿八)全

安貴王

秋立ちて、いくかもあらねは、木のぬぬる、朝けの風は、袂すゝしも。

(卅九全)

志貴皇子

たわやめの袖吹きかへす、あすか風、都をどほみ、いたづらにふく。

(三十全)

額田女王

にぎたづに、船乗りせんと、月までは、汐もかなひぬ。今はこぎでな。

(卅一)天智天皇崩御の時よめる

額田女王

かゝらむと、かねて知りせば、大御舟、はてし泊に、まめゆはましき、

(卅二)題知らず

譽謝女王

ながらふる、つまふく風の、さむき夜に、わがせの君は、獨かぬらむ。

(卅三全)

長屋王

岩が根の、こゝしき山を、越えかねて、ねには泣くとも、色に出めや。

(卅四)春雑歌

山部宿禰赤人

春の野に、莖つみにと、來しわれぞ、野をなつかしみ、一夜ねにける。

(卅五全)

赤人

あすよりは、若菜摘むと、占し野に、きのふも、けふも雪はふりつゝ、

(卅六)故藤原太政大臣の家の山池をよめる

赤人

いにしへの、古き堤は、年ふかみ、池のなきさに、みく、さかひにけり。

(卅七)懐を述ふ

憶良

あまさかる、ひなに一とせ、住ひつゝ、都のており、わすらえにけり。

(卅八)病あつしくて見等をあもふ歌

憶良

賤手巻、數にもあらぬ、身にはあれど、千歳にもがと、思ほゆるかも。

(卅九)病に沈める時よめる

憶良

おのこや空しかるべき、後の世に、語りつゝべき、名は立たずして、

(四十)京に上る時、娘子の送れるに答ふ

大伴宿禰旅人

ますらをど、思へる吾れや、みづらぎの、みづきの上に、涙のどはむ。

(四十一)都に歸りて後、滿誓がちくれる歌に答ふ

旅人

こゝにありて、筑紫やいづく、白雲の、た靡く山の、方にしあるらし。



(四十二)題しらず

滿智沙彌

世の中を、何にたとへむ。朝びらき、漕ぎいにし船の、跡なきかごと、

(四十三)全

長忌寸興磨

苦しくも、降りくる雨か。みわが崎、さぬの渡りに、家もあらなくに、

(四十四)藤原宇合卿西海節度使として遣はされしにおくる

高橋連蟲麻呂

千萬の、いくさなりとも、言あけせず、とりて來ぬべき男をぞ思ふ。

(四十五)倭人を誘ふ歌

博士消奈行文大夫

奈良山の、このてがしはの、二面にかにもかくにも、ねぢけ人も。

(四十六)題しらず

大伴家持

さをしかの、あさたつ野邊の、秋萩に、玉と見るまで、おけるしら露、

(四十七)全

家持

舟ぎほふ、堀江の川の、みなぎはに、來るつゝなくば、みやこ鳥かも。

(四十八)勇士の名を振ふとを慕ふ歌

家持

ますらをば、名をし立べし。後の世に、聞きつゝ人も、語りつゝがね、

(四十九)天平寶字二年春正月三日内裏の宴に玉帶を賜は

家持

初春の、はつねのけふの、玉はゞき、手にとるからに、ゆらぐ玉のを、

(五十)三年春正月一日因幡國應に於きて璽を賜はりし時

家持

あたらしき、年のはじめの、初春の、けふ降る雪の、いやまけよごと。

## 第三篇 中古の文學

## 中古の文

中古とは、桓武天皇延暦十三年、山城國なる平安京に遷都し給ひしより、源平の争亂ありし頃まで、大約四百年間を志か名つけつ。此の時期の始は、前代より引續き、漢學の勢力盛にして、國史も法律も、凡そ公用の記録は、悉皆漢文なりけるが、そのみにては、さすがに國語を譯すに、不便なりしかば、遂には必要に迫られて、假名の用世間に弘まり、隨ひて、假名がきの散文、多く顯はるゝに至りぬ。是れらを大かたに類別して、

物語文、序文、日記文、草子文、史傳文、消息文、

とす。かゝる區別は、或は性質により、或は體裁によりたるもあり。そも、漢文の上には、論、説、記、辨、などやうの諸體、おのづから定りて、別かるめれど、國文は然らず。物語中に論あり、序中に辨あり、草子中に、説あり、評ありなどして、論の體はとあり、辨の體はかゝりと、始めより體裁を備へたるものある事なし。されば、國

文の區別は、漢文などの上に云ふなる如きとは、全く同じからずと知るべし。

## ◎物語文

假名の廣く世間に行はれしより、諸種の散文顯はれたる中にて、今に遺れるは、物語文をいと古しとす。此の文體は、始め口語のままを寫せる如き、通常の文なりしが、やう／＼進みて、文句を華麗にする事となりぬ。而して其の性質は、多く一篇の小説なり。是れは、た初めは、いと單純なる趣向にして、後には、緻密に意匠を凝らし、或は支那の小説を、此の國の風に翻譯したるもあり、或は又、聊の事實を小説に附會したるもあり。なほ進みては、全く作者の肚裏より出で、空中に樓閣を構へ、その中に、自然と當時の世態を寫し、人情を穿ちて書き著したるもあり。故に物語の發達を一言に云は、初めは趣向も淡泊にして、文章も眞率なりしが、世を逐ひて趣向も巧妙になり、文章も極めて修飾を盡し、華麗婉曲ならんことを、勉むる様にぞなりにける。是れ世運の進化に伴ひて、さも成り行くべき自然の理なり。

物語の中にては、竹取物語を古しとす。伊勢物語これに次ぐべし。是れらの文は下に抄しき。此の外、宇津保物語、住吉物語、落窪物語、濱松中納言物語、大和物語、とりかへばやの物語、多武峯少將物語等あり。但し住吉と多武峯物語とは、後人の偽作なりといふ。なほ此の外に、名のみ聞えありて、その書の傳はらざるもの、三十餘部あり。是れらの小説、とりくに趣向を構へ、情致を寫せる中に、源氏物語は、趣向も文章も、絶世の佳作なること、世上の定説にして、物語文中、最上點に達したるものなり。故に此の書に當時の物語を代表せしめて、其の外は畧しにき。源氏より後に出來たる、狭衣の類もあれど、詞の花の色あせて、彼の紫の匂ひには、かけても及ばざるものなり。

### (二)竹取物語

竹取物語は、作者を詳にせず。作られし時代も、知られず。然れども延喜より以前、男の手に成りしものならむ。ある説に、仁明天皇の頃よりは、後醍醐天皇の頃よりは四五十年も前ならんと云ひ、又一説には、嵯峨天皇より、清和天皇の頃までの間に、才學すぐれたる人の、かけるならむとも云へり。作者の詳ならざるは、假

名文世に弘まりぬと雖、習慣の久しきにより、男子は猶得意に漢文かくを常として、假名文は女子の手に玩ばれたまふ。男子の假名文をかけるが有りても、其の名を隠し、或は女の様につくろへるにもよるべし。そは紀貫之が土佐日記をかけるも、男のすなる日記といふものを、女もして見んとてする也。と記し、又當時假名の異名を、女文字とさへ呼べる。にても知るべし。

扱此の物語の文章は、別に彫琢を加へたるあとも見えぬと、いと古雅にして、祝詞宣命などの詞づかひの、一變したるさまと覺ゆるもあり。そも、此の書は、源氏物語繪合の巻にも、物語の出來始めの祖なる、竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せて、云々とあれば、物語文の祖なることは云ふも更にて、すべての假名文の、鼻祖とも云ふべし。

本書の趣向は、契沖阿闍梨も、既に云はれし如く、寶樓閣經、漢書西南夷傳、其の外、何くれの佛經漢籍中の説により、邦人の口碑に傳はる、舊譚などを撮合して、醜案潤色したるならん。當時は既に搜神記、續齊諧記など、支那の小説書類も、盛に舶來したるべければ、其れらを見し人の、せし業ならんか。

發端の文

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、たけをとりつゝ、萬のことにつかひけり。名をはさぬきの、みやつこまろ、となんいひける。其の竹の中に、もとひかる竹、一すぢありけり。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中ひかりたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁云ふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中に、おはするにてゑりぬ。子になり給ふべき人なめりとして、手にうち入れて、家に持て來ぬ。妻の媪にあづけて養はす。美しき事限りなし。いとをさなければ、これいれて養ふ。竹取の翁、この子を見つけて、後に竹を取るに、節をへだて、よごごにこがねある竹を見つゝ、くることかさなりぬ。かくて、翁やうくゆたかになりゆく。此のちで養ふ程に、すく〜とおほきに成りま

さる。三月はかりになるほどに、よき程なる人になりぬれば、髪あけなどさだして、かみあけさせ、もきす。帳の中よりも出さず。いつきかしづき養ふ程に、此のちでのかたち、けうらなること、よになく、やのうちばくらき處なく、光満ちたり。翁こゝちあしく苦しき時も、此の子を見れば、苦しき事も止みぬ。ばらたしき事もなごさみけり。翁、竹を取ること久しくなりぬ。いきほひまうのものになりけり。此の子いとおほきに成りぬれば、名をは御室戸齋部の秋田をよびてつけさす。秋田、なよ竹のかや姫、とつけつ。此の程三日うちあけあそぶ。萬の遊びをぞしける。男女きらはず呼ひつごへて、いとかしこくあそぶ。世界のをのこ、あてなるも賤しきも、いかで此のかや姫を得てしがな。見てしがな。とおとに聞きめ、よまどふ。其のあたりの垣にも、家のとにも、をる人だに、たは

やすく見るまじきものを、よるは、やすきいもねず、やみの夜に出  
でしも、穴をくじり、こゝかしこよりのぞき、かいままどひあへ  
り。さる時よりなむ、よほひとは云ひける。人のものともせぬ處に、  
まどひありけども、何の志るしあるべくも見えぬ。家の人どもに、  
物をだにいばむとて、云ひけれども、ことゝもせず。あたりを離れ  
ぬ公達、よをあかし日をくらす人おほかり。おろかなる人は、やう  
なきありきは、よしなかりけりとて、こずなりにけり。其の中に猶  
いひけるは、色好みといはるゝかぎり五人、おもひやむ時なく、よ  
るひる來けり。其の名ひとりば石作皇子、一人はくらもちのみこ、  
一人は右大臣阿倍のみうし、一人は大納言大伴のみゆき、ひとり  
は中納言石上の麻呂、たゞ此の人々なりけり。(中畧)日暮るゝほど  
に例のあつまりぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或はしや

うかをし、或はうそをふき、扇をならしなどするに、翁出でゝ云は  
く、かたじけなくも、きたなけなるところに、年月をへて、物し給ふ  
こと、極まりたる、かしまりをまうす。翁のいのち、けふあすとも  
しらぬを、かくの給ふ君達にも、よく思ひ定めて、つかうまつれど  
申せば、ことわりなり。いづれも、劣りまさりおはしまさねは、ゆか  
しき物、見せ給へらむに、御心ざしの程は見ゆべし。つかうまつら  
むことは、それになむ定むべきといふ。これよき事なり。人の恨み  
もあるまじといへば、五人のひとゝも、よき事なりといへば、翁  
いりて云ふ。かゝや姫、石作のみこよは、天竺に佛の御石の鉢と云  
ふものあり。それを取りてたまへと云ふ。車持の皇子には、東の海  
に、蓬萊と云ふ山あり。それに白銀を根とし、金を莖とし、白玉を  
實として、たてる木あり。それ一枝をりてたまはらむと云ふ。今一

人には、唐土（たうど）にある火鼠の裘をたまへ。大伴の大納言には、龍の首に五色にひかる玉あり。それをとりて給へ。石上の中納言には、燕のもたる子安貝、ひとつとりて給へと云ふ。翁、かたき事どもにこそあなれ。此の國にある物にもあらず。かくかたき事をはいかに申さんと云ふ。かゝや姫、何かよたからむといへば、翁とまれかくなれ。まうさむとて、出でよ、かくなむ聞ゆるやうに、見せ給へといへば、皇子たち、かむたちへきよて、おいらかに、あたりよりだになありきそ。とやはのたまはぬ。といひて、うむじて皆かへりぬ。

石上中納言子安貝を索むる條

中納言石上の鷹は、家につかはるよをのこどもの許に、つはくらめの巢くひたらは、つはよとのたまふを、うけ給はりて、何のれうにかあらむと申す。答へての給ふやう、燕のもたる、子安貝とらむ

れうなりとの給ふ。をのこども答へて申す。燕を數多殺して見るだにも、腹になきものなり。但し子生むときなむいかでか出すらむ。ばら〜と、人だに見ればうせぬと申す。又人の申すやう、おほつかさの、いひかし、屋のむねの、つくのあなごに、燕はすくひ侍り。それに、まめならむをのこどもを、あてまかりて、あぐらをゆひて、あけてうかゞはせむに、そこの燕、子うまさらむやば。さてこそとらしめ給はめと申す。中納言喜び給ひて、をかしき事にも有るかな。もともえ知らざりけり。きようあると申したりとの給ひて、まめなるをのこども、二十人はかりつかはして、あなよひにあけすゑられたり。殿よりつかひひまなくたまはせて、子安貝とりたるかと問はせ給ふ。つはくらめも、人のあまたのほり居たるにおちて、巢にのほりこず。かゝるよしの御返事を申しければ、

聞給ひて、いかゞすべきと、おぼしめしわづらふに、かのつかさの  
 官人、くらつまろと申す翁、まうすやう、子安貝をとらむとおぼし  
 めさは、たばかり申さむとて、御前にまゐりたれば、中納言額をあ  
 はせてむかひ給へり。くらつまろが申すやう、此の燕の子安貝は、  
 あしくたばかりて、とらせ給ふなり。さては、えとらせ給はじ。あな  
 へひに、おどろくしく廿人のひとの、昇りて侍れば、あれてより  
 まうでこずなむ。せさせ給ふべきやうは、此のあなへひをこぼち  
 て、人皆しりぞきて、まめならむ人、ひとり、あらまにのせすゑて、  
 つなをかまへて、鳥の子うむ間に、綱をつりあけさせて、ふと子安  
 貝をとらせ給はむなむ、よかるべきと申す。中納言の給ふやう、い  
 とよき事なりとて、あなへひをこぼちて、人皆歸りまうできぬ。中  
 納言くらつまろに、のたまはく、燕はいかなる時に、か、子をうむと

志りて、人をはあふべきとの給ふ。くらつまろ申すやう、つほくら  
 めは、子うむとする時は、尾をさへけて、七たびめらりてなむ生み  
 おとすめる。さてなへたたびめらむ折、引きあけて、其のをり子安  
 貝は、とらせ給へと申す。中納言よろこび給ひて、萬の人にも志ら  
 せ給はで、みそかに、つかさに、いまして、とらしめ給ふ。くらつ麻呂  
 が、かく申すを、いといたくよろこび給ひての給ふ。こへにつかは  
 るへ人にもなきに、ねがひをかなふる事のうれしさ、といひて、御  
 衣ぬぎて、かづけ給ひつ。さらによさり此のつかさに、まうでこと  
 の給ひてつかはしつ。日くれぬれば、かのつかさにおはして見給  
 ふに、まことにつほくらめ、巢つくれり。くらつまろが申すやうに、  
 尾をさへけてめぐるに、あらこに人をのせて、つりあけさせて、つ  
 はくらめの巢に、手をさしいれさせてさぐるに、物もなしと申す

に、中納言あしくさふれはなきなりと、ばらたちて、誰ればかりか  
 ぼえむにとて、我れのほりてさふらむとのたまひて、こにのりて  
 つられのぼりて、うかゞひ給へるに、燕尾をさゝけていたくめ  
 るにあはせて、手をさゝけてさふり給ふに、手にひらめなるもの  
 さはる。時に、われ物にぎりたり。今はおろしてよ。翁えたりとの  
 給ひて、あつまりてとくおろさむとて、綱を引き過らして、綱絶ゆ  
 る、すなはち、八島のかなへの上、のけさまに落ち給へり。人々あ  
 さましがりて、よりてかゝへ奉れり。御目はまらめにてふし給へ  
 り。人々御口に水をすくひ入れ奉る。からうしていき出給へるに、  
 またかなへの上より、手とり足とりして、さけおろし奉る。からう  
 して、御心ちいかゞおぼさるゝと問へば、息のしたにて、物は少し  
 覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふとにぎりもたれば、

うれしく覺ゆるなり。先づ志そくさしてこ。此の貝かほ見むと、御  
 ふしもたけて、御手をひろけ給へるに、燕のまりおける、古くそを  
 握り給へるなりけり。それを見給ひて、あなかひなのわさや。どの  
 給ひけるよりぞ、思ふにたがふとをば、かひなしとはいひける。か  
 ひにもあらずと見給ひけるに、御心もたがひて、から櫃のふたに  
 入れられ給ふべくもあらず。御腰はをれにけり。中納言はいはけ  
 たるわざしてやむことを、人にきかせじと志給ひけれど、それを  
 病にて、いとよわくなり給ひにけり。貝をえとらずなりにけるよ  
 りも、人の聞きわらはむ事を、日にそへて思ひ給ひければ、たゞに  
 病み死ぬるよりも、人聞はづかしく、おぼえ給ふなりけり。是れを  
 かゝや姫聞きて、とふらひにやる歌、  
 年を経て、浪立ちよらぬ住の江の、



まつかひなしと聞くはまことか。

とあるをよみてきかす。いとよわき心地に、頭もたけて、人に紙をもたせて、くるしき心地に、からうして書き給ふ。

かひはかく、有りけるものをわびはてし、

死ぬるいのちを、すくひやはせぬ。

と書きはてし、たえいり給ひぬ。是れを聞きて、かぐや姫、すこしあはれとおぼしけり。それよりなむ、すこしうれしきことをほ、かひありとはいひける。

(二)伊勢物語

伊勢物語は、和歌より趣向を案出して、人の一代記やうの、小説にとりなしたる也。巻首に、昔をどと初冠はつむらして云々と書き初め、巻尾に、遂ついにに行く道とはかねてききしかど、きのふけふとは思はざりけり。といふ臨終の歌を載せて結局したる

にて、作者が意のある所を知るべし。扱此の書は、業平朝臣の作なりとも、伊勢の御の作なりとも云へる。舊説は辨ずるに足らず。是は業平の歌集やうの書ありけむを基として、歌の端書を敷衍潤色し、種々附會をもして、一冊子とは作したるならむ。されば竹取物語の如く、始終連続したるものならず。謂は、歌の序文のや、長きを、あまた集めて、順序よく排列したる如きさまなり。然れども、文體は竹取にも劣らず、遒強なる所ありて、而も極めて簡潔なり。

東下りの條

昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ。東の方に、住むべき所、求めにどて往きけり。信濃國淺間の嶽に、烟の立つを見て、

信濃なる、淺間のたけに、たつけふり

をちかた人の見やはどがめぬ。

もとより友とする人、一人二人して、諸共に往きけり。道知れる人

もなく、惑ひ行きけり。三河の國、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の、蜘蛛手に流れ別れて、木八つ渡せるによりてなん、八橋とはいへる。その澤の邊の木蔭におり居て、かれいひくひけり。その澤にかきつはたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつはたといふ五文字を、句の上に据ゑて、旅の心をよめど、いひければよめる。

唐衣きつゝなれにし、つましあれば、

はるくきぬる旅をしぞおもふ。

とよめりければ、皆人、かれいひの上になみだ落して、ほとびにけり。ゆきくゝて、駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて、我がいらんとする道は、いと暗う細きに、蔦葛ハしけりて、物心細く、すゞろなるめを見る事と思ふに、修行者逢ひたり。かゝる道には、いかでか、

おはするといふに、見れば、見し人なりけり。京に、その人の許にて、ふみ書きてつく。

駿河なる、うつゝの山邊のうつゝにも、

夢にも人に逢はぬなりけり。

富士の山を見れば、五月のつごもり、雪いと白う降り。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか、

かのこまだらに、雪のふるらん。

その山は、こゝに譬へば、比叡の山を、二十ほかり、重ねあけたらんほどして、なりは鹽尻の様に、なんありける。なほ、ゆきくゝて、武藏の國と下總の國との中に、いと大なる河あり。それを隅田川といふ。その河の邊に群居て、思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなど、わびあへるに、渡守は、や船に乗れ。日もくれなんといふに、乗

りて渡らんとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしも  
あらず。さる折しも白き鳥の、喉と足と赤き、まぎの大ききなる、水  
の上に遊びつゝ、魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。  
渡守に問ひければ、これなん都鳥といふを聞きて、

名にし負はゞ、いざ言問はん。みやこ鳥

わがおもふ人は、ありやなしやと、

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。

生駒山を見たる條

昔をどこ逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の國へきさらぎ  
ばかりにいさけり。河内の國、生駒山を見れば、曇りみ晴れみ、立ち  
る雲やまず。あしたより曇りて、晝晴れたり。雪いと白う、こずる  
にふりたり。それを見て、彼のゆく人の中に、唯ひとりよみける、

きのふけふ、雲のたちまひかくさふは。

花のはやしを、うしとなりけり。

惟喬親王を訪ひ奉る條

むかし、水無瀬にかよひ給ひし、惟喬の親王、例のかりしに、おはし  
ますとも、右馬のかみなるをきな、つかうまつれり。日ごろへて、  
宮に歸り給ひけり。御おくりして、とくいらんと思ふに、おほみき  
給ひ、祿たまはんとて、つかはさざりけり。この右馬の頭、心もとな  
がりて、

枕とて、草ひきむすぶともせじ。

秋の夜とだに、たのまれなくに、

とよみけり。時はやよひのつごもりなりけり。親王おほどのでも  
りて、あかし給ひてけり。かくまつゝ、つかうまつりけるを、思ひの

外にみづしおろし給ひてけり。むつきに、拜みたてまつらんとて、小野にまうでたるに、ひえ山のふもとなれば、雪いとたかし。まひて御室にまうで、をがみまつるに、つれづれといと物がなしくて、おはしましければ、やゝ久しくさぶらひて、古の事など、おもひ出で、聞えけり。さてもさぶらひてしが、なとおもへど、おほやけごともありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては、夢かどぞおもふ。思ひきや。

雪ふみ分けて、君を見んとは、

右大將の奉れる石に歌そへたる條

昔、たかい子と申す女御、おはしましけり。失せ給ひて、七々日のみわさ、安祥寺にてまけり。右大將藤原の常行といふ人、いまそがりけり。其の御わざにまうで給ひて、かへさに、山科の禪師の親王お

はします。其の山科の宮に、瀧落し水奔らせなどして、おもしろく作られたるに、詣で給ひて、年ごろよそには、つかうまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。今宵はこゝに候はむと申し給ふ。親王喜び給ひて、よるのおましの設けさせ給ふ。さるに、此の大將出で、たばかり給ふやう、宮つかへの始めに、唯なほやは有るべき。三條のおほみゆきせし時、紀の國の千里の濱に有りける、いと面白き石たてまつれりき。おほみゆきの後、奉れりしかは、ある人の、御曹司の前の溝に、するたりしを、島このみ給ふ君なり。此の石を奉らむとのたまひて、御隨身舍人して、とりに遣はす。幾はくもなく、持て來ぬ。此の石聞きしよりは、見るはまされり。これをたゞに奉らば、すゞろなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。右の馬の頭なりける人なん、青き苔をきさみ、て、蒔繪のかたに、この歌をつけて

奉りける。

あかねども、岩にぞかふる。色見えぬ、

こゝろを見せん、よしのなければ、

とよめりけり。

(三)源氏物語

源氏物語は紫式部の作なる事、雖れ知らぬものもあらじ。式部は一條天皇の皇后、上東門院に仕へたりし女房なり。本名は何とか云ひし。詳ならず。始めは藤式部と呼ばれたり。父は藤原爲時とて、式部丞たりしからに、父の官名を姓にかけ、藤式部とは云へるなり。扱式部の傳は、委しく知る事能はざれど、みづから書ける日記に基きて、安藤氏の紫家七論といふ書に、式部は左衛門、權佐、藤原、宣孝朝臣に嫁して、大武三位後衣物語の作と辨、肩とを生みて、後、長保三年四月に、夫宣孝みまかりしかば、四五年ばかり寡居してありしが、寛弘二三年の頃より、上東門院へ宮仕へに出でられし様なりと記し、又此の物語作られたるは、其の寡

居の程の事なる由、並びに萬壽二年の比まで、存存生生て上東門院に仕へられし由をも、委しく記せり。

次に安藤氏は、本書の文辭のめでたき事をも述べて云はく。此の物語のうち、和歌並びに詞ともに、萬葉、古今、伊勢物語、宇津保、竹取などの古躰を離れて、まかもおほどかに、易易らかに、優優しく、凡そ我が國の風流を盡したれば、見る人をして、倦む事を知らざらしむ。誠に日本日本文の上なきものなり。全篇は富貴温潤の氣象にして、宮様の文章なれども、中に山林出世あり、市井田家あり、貧困哀傷あり、閨情風景は、卷毎に見えて、情を寫し、景を語る事、まのあたり、其の人にむかひ、其所に遊ぶが如し、全體に傳にして、又自自つから序の躰あり、跋あり、記あり、書ありて、諸躰備り、中畧論破あり、論承あり、論腹あり、論尾あり、鹿より細に入り、俗より雅に趣き、繁より簡に歸し、波瀾、頓挫、照應、伏案などいふ、もろこしの文法、ちのづから具はれり。其の氣脈は、悠暢として、寛裕に、其の文勢は、圓活にして、婉曲なり。之を漢文にて見ば、史記、莊子、韓柳、歐蘇にひとしかるべしと、  
此の物語の趣向も、大かたの人の、熟知する所なれば、今更に云はず。但し式部が

之を著述したるに就きては、種々の説どもありて、或は勸善懲惡のためと云ひ、或は好色の禁戒なりとも論じ、甚しきは當時宮闈中にありし事實を記したるにて、其を諷刺のためとなし、書中の帝王を、何某天皇の御事なり、くれがしの宮にあたるなど、おしあてに附會したるもあれど、悉くひがごととなり、本居翁ひとり能く、物語の性質を辨明して云はく、大かた物語は、世の中にある善き事、惡しき事、珍らしき事、をかき事、面白き事、哀なる事、のさま／＼を書きあらはして、其の様を繪にもかきまじへなどして、徒然なる程の玩びにし、又は心の結ばれて、物思はしき折などの、慰めにもし、世の中のある様を心得て、物のあはれをも知るものなり。とて、物のあはれといふとを、更に辨じて、「人は何事にまはれ、感ずべき事にあたりて、感ずべき心を知りて、感ずるを、物のあはれを知るとはいふ」と云へり。畢竟するに、物語小説は、讀者の感情を惹起するを、本旨とするなり。是れ古今の小説に通じて、動かざる論と云ふべし。かゝれば源語は、物のあはれのいと切なる、戀情を主としてかきたれば、淫猥なる記事、書中に多かり、然れども、之を以て、直に式部の身上にも論及し、淫行不貞の女性なりと、思へるは

誤なり、式部は夫宣孝に別れてより、其が菩提の爲に、尼にならむの本意なりしが、さては二人の女子の生先も覺束なくて、二女の成長を待ちつゝ、心ならずも上東門院に宮仕へしたりしなり。門院の父道長公は、御堂關白と稱して、當時天下に肩を比ぶべき方もなき、威權ありし人なりしが、式部の才色に懸想し、わたり、心を盡したりけれども、式部はことよく逃れて、出家の本意を遂げんと思へる氣息は、自づから書ける文にも歌にも顯はれて、其の貞操の高きを見るに足る。且又大かたの女性は、かばかり學文すぐれぬれば、物識りがましく、誇りかなる容躰も見ゆるものなるに、式部は深く其の能を隠して、人に知られじと勤めし事、日記に徴あり。又源氏物語も、さばかり戀情の事をかゝれたる中に、自然婦人の用意を述べたる所いと多かり。

式部はかく、才學徳の三つを、兼備せし人なりながら、其の著書は、殆ど敗徳亂倫の記事を以て充たされ、或は誨淫の書なりと、擯斥せらるゝはいかにぞや。按ふに、文學は世態人情の反映なり。當時上流社會の淫風甚しく、道徳の程度いと低かりしに、其の風俗人情を、さながら撮影せしからに、遂に茲には至りしか。さば

かり用意深き式部にして、謂ふも厭はしき事からを、忌憚なく書かれしは、頗る不審の事ながら、當時の人も疑かはず、自づからも、さして耻ぢざりしを見れば、其の世の情態いかなりしかは察するに足るべし。そも、此の物語の趣向文章は、真と美とを兼ねたりと雖善の一分子を缺きたるは、式部のためにも、本邦文學の上にとりても、極めて遺憾の事といふべし。扱此の書は、今より凡九百年程前に著はされたるなり。

桐壺の更衣のなきあとの條

野分たちて俄に膚寒き夕暮のほど、常よりも思しいづる事多くて、<sup>命婦</sup>の命婦といふをつかばず、夕月夜のをかしきほどに、いだしたてさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせ給ひしに、こゝろことなる物のねをかきならし、はかなくきこえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひかたちの、おもかけにつとそひておぼさるゝも、やみのうつゝに

は、なほ劣りけり。命婦かしこにまかてつきて、かどひきいるゝより、けはひあはれなり。やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、どかくつくろひたてゝ、めやすきほどにて、すらし給ひつるを、やみにくれて、ふしとづみ給へるほどに、草も高くなり、野分にとゞ荒れたることゝちして、月かけばかりぞ、やへむらにも障らず、さしいりたる。南おもてに、おろして、母君とみねえ物もの給はず。今<sup>母、</sup>までとまり侍るが、いと憂きを、かくる御使の、よもぎふの露分け入り給ふに、つけても、いと耻かしうなんとて、けにえ堪ふまじくない給ふ。参<sup>命婦、</sup>りてはいとゞ心苦しう、心肝もつくるやうになんと、内侍のすけのそうし給ひしを、物思ひたまへ知らぬことゝちにも、けにこそいと志のびがたう侍りけれ。とて、やゝためらひて、おほせごと傳へ聞こゆ。志はしは夢かとのみたどられしを、やう

く思ひまづまるにしも、覺むべきかたなく堪へがたきは、いか  
 にすべきわざにかとも、問ひ合はすべき人だになきを、志のびて  
 は参り給ひなんや。わかみやのいとおぼつかなく、露けき中にす  
 らし給ふも、心苦しうおぼさるゝを、とく参り給へなど、はかく  
 しうも、のたまはせやらず。むせかへらせ給ひつゝ、且は人も心よ  
 わく見奉るらんと、おぼしつゝまぬにしもあらぬ、御けしきの心  
 苦しさに、うけたまはりもはてぬやうにてなん、まかで侍りぬる。  
 とて御文たてまつる。目母、同も見え侍らぬに、かくかしたきおほせご  
 とを光にてなん。とて見給ふ。ほど御文、コト、経は、少しうちまざるゝこと  
 やと、待ち過らす月日にそへて、いと忍びがたきは、わりなきわざ  
 になん。いはけなき人も、いかにと思ひやりつゝ、もろともにはら  
 へまぬおぼつかなさき、今は猶昔の形見にならずらへて、ものし給

へなど、細かに書かせ給へり。

宮城野の露ふきむすぶ風の音に、

こ萩がもとを、思ひこそやれ。

とあれど、え見給ひはてず。命母、コト、長さの、いとつらう思ひ給へまらる  
 ゝに、松の思はんことだに、耻かしう思ひ給へ侍れば、もゝしきに  
 ゆきかひ侍らんことは、ましていと憚り多くなん。かしたき仰せ  
 ごとを、たびくゝうけ給はりながら、みづからはえなん思ひ給へ  
 たつまじき。若宮は、いかにおもほし知るにか。参り給はんことを  
 のみなん、おぼし急めれば、ことわり悲しう見奉り侍るなど、  
 うちうち思ひ給ふる。さまを、奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かく  
 ておはしますも、いまくゝしう、かたじけなくなどの給ふ。宮は大  
 との籠りにけり。見命、たてまつりて、委しく御有様も奏し侍らまほ



しきを待ちおはしますらんを、夜更け侍りぬべじ。とて急ぐ母。くれ  
 まどふ心のやみも、堪へがたき片端をだに、はるくばかりに聞え  
 まほしう侍るを、私にも、心のどかにまか、で給へ。としごろうれし  
 く、おもたゞしきついでにのみ、たちより給ひしものき、かゝる御  
 せうそこにて、見奉る、かへすト。つれなき命にも侍るかな。生れ  
 し時より、思ふことろありし人にて、故大納言いまはとなるまで、  
 唯この人の宮仕へのほい、必ず遂げさせ奉れ。我れなくなりぬと  
 て、くちをしう思ひくづほるなど、かへすト。いさめおかれ侍り  
 しかは、はかト。しう後見思ふ人なきまじらひは、なかくトなる  
 べき事と思ひ給へながら、たゞ彼の遺言をたがへじ。とはかりに、  
 いだしたて侍りしを、身にあまるまでの御心さしの、よろづにか  
 たじけなきに、人氣ひなき耻を隠しつゝ、まじらひ給ふめりつるを、

人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなりそひ侍るに、よ  
 こそまなるやうにて、遂にかくなり侍りぬれば、かへりてはつら  
 くなん、かしこき御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみ  
 になん。といひもやらず、むせかへり給ふほどに、夜もふけぬ命結詞。上も  
 志かなん。わか御心ながら、あながちに、人目驚くばかりおぼされ  
 しも、ながゝるまじきなりけり。といまはつらかりける人のちぎ  
 りになん。世にいさトかも、人の心を曲けたることあらじ。と思ふ  
 き、たゞこの人ゆゑにて、あまたさるまじき人の、うらみをおひし  
 はてト。は、かトううち捨てられて、心をさめん方なきに、いどト人  
 わろく、かたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなん。どうち  
 かへしつゝ、御志ほだれがちにのみおはします。とかたりてつき  
 せず。なくト、夜命結詞いたう更けぬれば、こよひすすさず。御かへり奏

せん。とて、急ぎまゐる。月は入りがたの空清う澄みわたれるに、風  
いとすゞしく吹きて、草むらの虫のこゑも、もよほしがほなる  
も、立ち離れにくき草のもとなり。

命婦歌

すゞむしの、聲のかぎりをつくしても、

ながき夜あかずふるなみだかな。

えものりやらず。

母歌

いとゞしく、虫のねまけき、あさぢふに、

露おきそふる雲のうへびと、

かごとも聞えつべくなん。といはせ給ふ。をかしき御送り物など、  
あるべきをりに、あらねば、たゞかの御形見にとて、かゝる用も  
やどの、こしおき給へりける、御さうぞくひとくたり、御さしあけ  
のでうとめく物そへ給ふ。わかき人々、悲しきことは、更にも云は

ず、内わたりを朝夕にならひて、いとさうとゞしく、うへの御あり  
さまなど、思ひいできこゆれば、とくまゐり給はんことを、そゝの  
かし聞ゆれど、かくいまゝしき身のそひ奉らんも、いと人ぎよ  
うかるべし。又見奉らで、まほしもあらんば、いとうしろめだう思  
ひ聞え給ひて、すがくともえまゐらせ奉り給はぬなりけり。命  
婦は、まだおほどのでもらせ給はざりけるを、あはれに見奉る。お  
まへのつぼせんさいの、いとおもしろきさかりなるを、御らんず  
るやうにて、まのびやかたに、心にくきかぎりの女房四五人、さぶら  
はせ給ひて、御物がたりせさせ給ふなりけり。このころあけくれ  
御覽ずる、長恨歌の御繪、亭子、院のかゝせ給ひて、伊勢貫之によま  
せ給へる、大和言葉をも、もろこしのうたをも、唯そのすぢをぞ、ま  
くらごどにせさせ給ふ。いとこまやかたに、有様を問はせ給ふ。あは

れなりつること、志のびやかに奏す。御返り御覽ずれば、いと文、同もか  
しときは、おきどころも侍らず。かゝる仰せ言につけても、かきく  
らすみだりごゝちになん。

あらしき風、ふせぎしかけのかれしより、

こはぎが上ぞ、志づこゝろなき。

などやうに、みだりがはしきを、心をさめざりけるほど、御覽じ  
ゆるすべし。いとかうしも見えじとおぼし、志づむれど、さらにえ  
志のひあへさせ給はず。御覽じ始めし年月の事さへかきあつめ、  
よろづにおぼしつゝけられて、時の間もおぼつかなかりしを、か  
くても月日はへにけり。とあさましうおぼしめさる。故大納言の  
遣言あやまたず。宮つかへのほい、ふかく物したりしよろこびは、  
かひあるさまに、とこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや。どうち

の給はせて、いとあはれにおぼしやる。かくてもおのづから、若宮  
などおひいで給はゞ、さるべきついでもありなん。命ながくとこ  
そおもひねんせめ。などのたまはず。かのおくり物御覽せさす。な  
き人のすみかたづねいでたりけん、志るしのかんざしならまし  
かば、とおもほすもいとかひなし。

たづねゆくまほろしもがな。つてにても、

たまのありかきそこと志るべく。

るにかけ、揚貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆かぎ  
りありければ、いとほひすくなし。太液の芙蓉、未央の柳も、けに  
かよひたりしかたちを、からめいたるよそひは、うるはしうこそ  
ありけめ。なつかしう、らうたけなりしを、おぼしいづるに、花鳥の  
色にも音にも、よそふべきかたぞなき。朝夕のごとく、さにも、羽を

ならべ、枝をかばさん。どちぎらせ給ひしに、かなはざりけるいのちのほどぞ、つきせずうらめしき。風のおと、虫のねにつけても、物のみかなしうおぼさるゝに、弘徽殿には、久しう上の御局にもまうのほり給はず。月のおもしろきに、夜ふくるまで、あそびをぞし給ふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。此の頃の御けしきを見奉る、うへ人女房などは、かたはらいたしとき、けり。いとあしたちかどくしき所、ものし給ふ御かたにて、ことにもあらずおぼしけちて、もてなし給ふなるべし。月もいりぬ。

雲のうへも、なみだにくるゝ秋の月、

いかですむらん。あちぢふのやど。

おぼしやりつゝ、ともし火をかゝけつくして、おきおぼします。右近のつかさの、どのゐまうしの聲聞ゆるは、うきになりぬるなる

べし。人めをおぼして、よるのおとゞにいらせ給ひても、まどろませ給ふことかたし。あしたに起きさせ給ふとても、あくるも志らで、どおもほしいづるにも、なほ朝まつりごとは、怠らせ給ひぬべかめり。ものなごもきこしめさず、朝がれひのけしきはかり、ふれさせ給ひて、大床子の御ものなどは、いとほるかにおぼしめしたれば、陪膳にさふらふ限りは、こゝろぐるしき御けしきを見奉りなけく。すべて近うさふらふ限りは、をどこ女、いとわりなきわさかな。といひあはせつゝなけく。さるべき契りこそはおぼしましけめ。そごらの人のそしりうらみをも、ばゞからせ給はず。この御事にふれたることをは、道理をも失はせ給ひ、今はたかく世の中の事をも、おぼしすてたるやうになりゆくは、いとたいくしきわさなり。ど人のみかどのためしまでひきいでつゝ、さゝめきな

けきけり。

何某院の變化の條

宵過ぐる程、すこし寝<sup>寝</sup>いり給へるに、御枕上に、いとをかしけなる女居て、おのがいとめでたしと見奉るをは、尋ねも思ほさで、かく殊なる事なき人をゐておぼして、ときめかし給ふこそ、いとめざましくつらけれ。とて、此御傍の<sup>多</sup>人を、かき起さんとすと見給ふ。物に驚<sup>驚</sup>ばるゝ心地して、驚き給へれば、火も消えにけり。うたて覺さるれば、太刀を引抜きて打置き給ひて、右近をおこし給ふ。これ<sup>右近</sup>も恐ろしと思ひたる様にて、参り寄れり。渡殿なるとのゐ人起して、紙燭さして参れ。と云へ。どのたまへは、いかでかまからん。闇うて、といへば、あな若々しと打笑ひ給ひて、手をたゝき給へば、山びこの答ふる聲いとうとまし。人はえ聞きつけで参らぬに、此の女君

いみじくわなゝきまどひて、いかさまにせんと思へり。汗もしとゝになりて、われかのけしきなり。物<sup>右近</sup>おちをなん、わりなくせさせ給ふ御本性にて、いかに覺さるゝにか。と右近も聞ゆ。いとかよわく、晝も空をのみ見つるものをいとほし。と覺して、我<sup>源</sup>れ人を起さん。手をたゝけは、山びこの答ふるいとうるさし。爰に志ほし近くとて、右近を引寄給ひて、西の妻戸に出で、戸押しあけ給へれば、渡殿の火も消えにけり。風すこし打吹きたるに、人は少くて、候ふ限り皆寐たり。此の院の預りの子の、睦まじく使ひ給ふ若き男、又うへ童<sup>童</sup>一人、例の隨身はかりぞ有りける。召せば答へして起きたれば、紙燭さして参れ。隨身も弦打して、絶えず聲<sup>聲</sup>つくれ。と仰せよ。人離れたる所に、心どけてもいぬる物か。惟光の朝臣の來りつらんば、と問はせ給へば、候ひつれど、仰せどもなし。曉に御迎へに参

るべき由申してなん、まかで侍りぬる。と聞ゆ。(中略)還り入て探り給へば、女君はさながら臥して、右近はかたはらに、うつおし臥たり。こは源など。あな物狂ほしもののおぢや。荒れたる所は、狐などやうの物の、人おびやかさんとて氣け憐ろしう思はするならん。まろあれは、さやうの物にはおどされじ。とてひき起し給ふ。い右近どうたて亂り心地のあしう侍れは、うつ伏たふして侍るなり。御前にこそ、わりなく覺さるらめ。といへば、そ源よ。などかうは、とてかい探り給ふに息もせず。引動かし給へど、なよくとして、我れにもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、ものに、けどられぬるなめり。とせん方なき心地し給ふ。紙燭もて参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引寄せて、なほもて参れ。どのたまふ。(中略)めし寄せて見給へば、唯この枕がみに、夢に見えつる形

したる女、おもかけに見えて、ふと消失せぬ。昔物語などにこそ、かゝる事は聞け。といと奇つらかに、むくつけけれど、まづ此の人いかになりぬるぞ。とおもほす心さわぎに、身の上も知られ給はず。添伏して、やゝと驚かし給へど、たゞひえにひえいりて、息は疾く絶はてにけり。(中略)さこそ心つよがり給へど、若き御心地にて、いふがひなくなりぬるを見給ふに、やる方なくて、つと抱きて、あが君いき出給へや。いみじきめな見せ給ひそ。どのたまへど、ひえいりにたれば、けはひ物疎くなりゆく。右近は唯、あなむづかしと思ひける心地皆さめて、泣惑ふさまいみじ。南殿の鬼の、何某の大臣をおびやかしけるためし覺し出で、心強く、さりともしいたづらに成果給はじ。夜の聲はおどろくし。あなかま。といさめ給ひて、いとあわたししきに、あきれたる心地し給ふ。此の男をめして、こゝ

にいとあやしう、物に驚はれたる人の、惱ましけなるを、たゞ今惟光の朝臣のやどれる所にまかりて、急ぎ参るべき由いへ。と仰せよ。(中略)など物のたまふ様なれど、胸はふたがりて、此の人を空しく去なしてんこと、の、いみじく覺さるゝに添へて、大かたのむくくしさを、たとへんかたなし。夜中も過ぎにけむかし。風のやゝ荒々しう吹きたるは、まして松のひゞき、木深く聞えて、氣色ある鳥のから聲に鳴きたるも、ふくろふはこれにや。と覺ゆ。打思ひ廻らすに、こなたかなた氣遠く、疎ましきに、人聲せず。などてかく、はかなき宿りはとりつるぞ。と悔しさもやらん方なし。右近はものも覺えず、君につとそひ奉りて、わなゝき死ぬべし。又これもいかならん。と心そらにて、とらへ給へり。我ひとりさかしき人にて、覺し遺る方ぞなきや。火はほのかにまたゝきて、母屋のきはに立てた

る屏風のかみ、こゝかしこのくまゝしく見ゆるに、物の足音ひしくと踏鳴しつゝ、うしろより寄り來る心地す。惟光疾く参らなん。と覺す。ありか定めぬものにて、こゝかしと尋ねける程に、夜のある程の久しさ、ちよをずさん心地し給ふ。

## 源氏物語の中須磨の配所の條

須磨には、心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、關吹きこゆると云ひけむ浦波、よるくはけにいと近く聞えて、又なくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、うちやすみわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそはたてゝ、四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立來ることちして、涕おつとも覺えぬに、枕うくはかりに成りにけり。琴をすこしかきならし給へるが、我れながらいとすごう聞ゆれば、ひ

きさし給ひて、

戀ひわびて、なくねにまがふ浦波は、

おもふ方より風や吹くらむ。

どうたひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに志のはれて、あいなう起居つゝ、ばなを忍びやかにかみわたす。けにいか思ふらむ。我が身一つにより、親はらから片時立離れがたく、程につけて、いとかく思ひ洗ひさまき、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれと戯れごと、うちのたまひまぎらはし、つれづれなるまゝにいろくの紙をつぎて、手ならひをしたまふ。めづらしき様なる、からのあやのなごに、さまづのるごもき、かきすさび給へる、屏風のおもてごもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語り

聞えし海山の有様を、遙におぼしやりしを、御目に近くては、けに及ばぬ磯のたゝずまひ、になくかきあつめ給へり。此の頃の上手にすめる、干枝、常則なごめして、作り繪をつかうまつらせはや。と心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様に、世のもの思ひ忘れて、近うなれ仕う奉るを嬉しきとにて、四五人はかりぞつと候ひける。前裁の花色々咲きみだれ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出給ひて、たゝずみ給ふ御さまの、ゆゝしうきよらかなる事、ところがらはまして、この世のものともみえ給はず。白き綾のなよゝかなる志をん色など奉りて、こまやかなる御なほし帯しどけなくうちみだれたまへる御さまにて、志やかなるにふつでしと名のりて、ゆるゝかによみ給へる、また世に去らずきこゆ、沖より舟ごものうたひのゝ去りて、こぎ行くなどもきこゆ。ほの



かに唯ちひさき鳥のうかべると見やらるゝも、心ほそけなるに、  
かりのつらねてなく聲、かぢの音にまがへるを、うちながめ給ひ  
て、御涙のこぼるゝを、かきはらひ給へる御手つき、くろぎの御ず  
ゝにはえ給へるは、故郷の女戀しき人々のこゝろ、皆なふさみに  
けり。

初雁は、こひしき人のつらなれや。

たびの空とおこるのかなしき、

どのたまへは、長清、

かきつらね、昔のことぞおもほゆる。

かりはそのよの友ならねども、

民部太輔、

心からどこ世をすてゝなく雁を、

雲のよそにもおもひけるかな。

さきの右近のせう、

どこよ出でゝ、たびの空なる、雁がねも、

つらにおくれぬ程ぞなふさむ。

友まどはしては、いかに侍らまし。といふ。右近ノセツハおやのひたち成りて  
くだるにもさそはれで、参れる也けり。またには思ひく、だくべか  
めれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。月のい  
とはなやかにかにさし出でたるに、こよひは十五夜なりけり。と覺し  
出でゝ、殿上の御遊びこひまゝ、所々ながめ給ふらんかし。とおも  
ひやり給ふにつけても、月のかほのみまもられ給ふ。二千里外、古  
人、心とずしたまへる、例の涙もとゞめられず。入道の宮のきりへ  
だつるとの給はせし程、いはんかたなく戀ひまゝ、をりくゝの事

思ひ出給ふによゝとなかれ給ふ。夜侍臣ふけ侍りぬ。ときこゆれど、猶  
いり給はず。

みる程ぞまほし慰む。めぐりあはん、

月の都へはるかなれども、

その夜、上のいとなつかしう、昔物語などま給し御様の夢に見た  
てまつり給へりしも、戀ひしく思ひ出できこえ給ひて、恩賜の御  
衣は、今こゝにありとずしつゝ入り給ひぬ。御衣は、まことに身は  
なたず、かたはらにおき給へり。

うしとのみ、ひとへに物はおもほえで、

ひだりみぎにもぬるゝ袖かな。

薰中將宇治宮の姫君を垣間見の條

有明の月の、まだ夜深くさし出づる程に出立で、いと忍びて、御茶

供中將ノに人などもなく、やつれておはしけり。河のこなたなれば、舟な  
どもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに、霧ふた  
がりて、路も見えぬまけ木の中を分け給ふに、いとあらましき風  
のきほひに、ほろゝと落ち亂るゝ、木の葉の露の、散りかゝるも、  
いとひやゝかに、人やりならず、いたく濡れ給ひぬ。かゝるありき  
なども、まさゝく習ひ給はぬ心地に、心細くをかしう覺されけり。

山おろしにたへぬ木葉の露よりも、

あやなくもろき我が涙かな。

山がつの驚くもうるさしとて、隨身の音もせさせ給はず。柴の籬  
を分けつゝ、そこはかどなき水の流れどもを、踏みしだく駒の足  
おとも、猶忍びてと用意し給へるに、かくれなき御匂ひぞ風に從  
ひて、ぬしまらぬ香と驚くねぎめの家々ぞ有ける。近くなる程に、

其の事とも聞き分かれぬ物のねども、いとすでけに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くを、ついでなくて、御子の御きんのねの名高きも、えきかぬぞかし。よき折なるべし、と思ひつゝ、入り給へば、琵琶の聲の響なりけり。黄鐘調に志らべて、世の常の搔合せなれど、所がらにや。耳なれぬ心地して、かき返す撥の音も、物清けに面白し。箏のこと、あはれになまめいたる聲して、たえづ、聞ゆ。志はし聞かまほしきに、忍び給へど御けはひまるく、聞付けて、殿居人めくをのこ、なまかたくなまき、出来たり。志か、なん籠りおはします。御せうそこをこそ聞えさせめと申す。なにかば、志か限りある御行ひの程を、まぎらばし聞えさせんに、あいなし。かく濡れぬれまゐりて、いたづらに歸らんうれへを、姫君の御方に聞えて、あはれとの給はせばなん、慰むべき。との給へば、見にくき顔うちる

みて、申させ侍らんとて立つを、志はしやと召しよせて、年ごろ人傳にのみ聞きて、ゆかしく思ふ御琴の音どもを、嬉しき折かな。志はし少し立隠れて聞くべき物の隈ありや。つきなくさし過ぎて参りよらん程、皆ことやめ給ひては、いとほいなからんとの給ふ。御けはひ顔かたちの、さる直々しき心地にも、いとめでたく忝く覺ゆれば、人聞かぬ時は、あけ暮かくなん遊ばせど、下人にて、都の方より参り立まじる人侍る時は、音もせさせ給はず。大かたかくて、女君たちおはします事を、かくさせ給ひ、なべての人に知らせ奉らじと覺しのたまはする、と申せば、打笑ひて、あぢぎなき御物隠しなり。志か忍び給ふなれど、皆人有り難き世のためしに、聞出づべかめるを、との給ひて、なほ志るべせよ。我はすきくしき心などなき人ぞ。かくておはしますすら、御有様の、あやしく、け

になべてに覺え給はぬ也。どこまやかにの給へば、あなかしこ、心なきやうに、後の聞えや侍らんとて、あなたの御前は、竹のすいがいしこめて、皆へだてことなるを、教へよせ奉れり。御供の人は、西の廊によび居るて、此の殿居人あへしらふ。あなたに通ふべかめる、すいがいの戸を少し押開けて見給へば、月をかしき程に、霧りわたれるを眺めて、すだれを少し短く巻上げて、人々居たり。簀子にいと寒けに、身ほそくなえはめるわらはひとり、同じ様なるおとな杯居たり。内なる人、ひとりは柱にすこし居隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲隠れたりつる月の、俄にいとあかくさし出でたれば、扇大姫君扇ならで是れしても、月は招ぎつべかりけり。とてさし覗きたる顔、いみじくうたけに、匂ひやかなるべし。添伏したる人中君は、この上に傾きかゝりて、入る日

をかへす撥こそ有りけれ。さまことにも思及び給ふ御心かなとて、打笑ひたるけばひ、今すこし重りかに、よしづきたり。及はずとも、これも月に離るゝ物かは。などはかなきことを、打どけのたまひかはしたる御けばひども、更に余所そに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをか。昔物語などにかたり傳へて、若き女房杯の讀むを聞くに、必、かやうのことを云ひたる、さしもあらざりけん、と、よく推しはからるゝを、けにあはれなる、物の隈あるべき世なりけり。と心うつりぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。また月さし出なるとおぼす程に、奥の方より、人おはすと告げ聞ゆる人やあらん。すだれおろして皆入りぬ。

◎序文

物語文に次ぎて出来しは、序の文體なり。但し序には、書籍の序と、歌の序との別

あり。歌の序とは、歌の端書（まがき）即ち小引の如きものなれど、大かた其の歌なり書なり如何にして詠まれたるか如何にして著はされしかの由來を述べたる點に至りては、全く異ならねば、文體は同じからねど一つに掲げつ。

序文の中にて、古今和歌集の序は、書冊の序なり。大堰川行幸奉和歌序は、またく歌の序なり。此の外平兼盛の子、日行幸奉和歌序、源順の庚申夜奉和歌序もまた同じ。昔の序にては、古今の序の外、後拾遺集の序を抄して、對照批判の資に供せん。

(二)古今和歌集序

古今集序は、醍醐天皇の延喜五年（今より九百九十餘年前）御書所預紀貫之を首として、歌人五つたり詔を奉じて撰みたる所なり。貫之は、武内宿禰の後、長谷雄の孫にして、土佐守を歴て木工頭となり、從五位上に叙せられ、天慶九年に卒せしが、元來和漢の學に通じ、殊に和歌におきては、人麿以來の神仙と仰がれし人なり。當時かゝる文は、皆漢文に物する例なりしに、貫之朝臣、日本魂強くして、遂

にかく勅撰の書に國文の序を加へ、空前の例を創めつ。いと雄々しくもめでたし。此の文は、實に本邦序體文の嚆矢なり。扱此の集には、別に紀淑望のかけりといふなる漢文の序ありて、假名序は、それを和譯せし也との説あれど、浮きたる言なり。余はむしろ、右の説と表裏なる考案あり、折を得て述ぶる事あるべし。

やまと歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざまけきものなれば、心に思ふ事を、見る物、聞く物につけて、いひ出せるなり。花に啼く鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌をよまさりける。力をもいれずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神（かみかみ）をも、あはれと思はせ、男女の中をも、和らけ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。この歌、天地の開け始まりける時より、出來にけり。まかあれども、世に傳はる事は、ひさかたの天にしては、下照姫に始まり、あらがねの地にし

ては、須佐之男、命よりぞ起りける。ちはやふる神代には、歌の文字も定まらず。すなほにして、ことの心、わきがたかりけらし。人の世となりて、須佐之男、命よりぞ、三十文字あまり一もじはよみける。かくてぞ、花をめで鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしお心詞多く、さまざまになりける。遠き所も出でたつ足もとより始まりて、年月をわたり、高き山も麓の塵土よりなりて、天雲たなびくまで、おひのほれる如くに、此の歌も、かくの如くなるべし、難波津の歌は、帝の御始めなり。淺香山の言の葉は、采女の戯れよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始めにもまける。そもく、歌のさま六つなり。からの歌にも、かくぞあるべき。其の六種の一つには、そへ歌、おほさゝぎのみかどをそへ奉れる歌」

なにはづに、咲くやこの花冬ごもり、

いまは春べと、さくやこの花、

といへるなるべし。二つには、かぞへうた、

咲く花に、思ひつくみのあぢきなさ、

身にいたづきの、いるもまらずて、

といへるなるべし。三つには、なずらへうた、

君にけさ、あしたの霜の、おきていなは、

戀しきごとに、消えやわたらむ。

といへるなるべし。四つには、たとへうた、

わが戀は、よむともつきじ、荒磯海の、

濱のまさごは、よみつくすとも、

といへるなるべし。五つには、たゞことうた、

偽りのなきよなりせは、いかばかり、

人の言のは、うれしからまし。

といへるなるべし。六つには、いはひうた、

此の殿は、うべもとみけり。さき草の、

みつはよつはに、殿つくりせり。

といへるなるべし。今の世の中、色につき、人の心、花になりけるより、あだなる歌は、かなきとのみ出でくれは、色ごのみの家に、埋木の、人忘れぬ事となりて、まめなる所には、花薄ほに出だすべき事にもあらずなりたり。其の始めを思へば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの代々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さふらふ人々をめして、事につけつゝ、歌を奉らしめ給ふ。あるは花をもてあそぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、

おこりて  
の下一本  
今日の本  
三字あり

去るべき閑にたどれる、心々を見たまひて、さかし、おろかなりと、去ろしめしけむ。まかあるのみにあらず。さゞれ石にたどへ、筑波山にかけて、君を願ひ、よろこび身にすぎ、樂しみ心にあまり、富士の煙によそへて、人をこひ、松虫の音に、友を忍び、高砂、住の江の松も、あひおひのやうに覺え、男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくぬるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又春のあじたに、花のちるを見、秋の夕暮に、木の葉の落つるをき、あるは、年毎に、鏡の影に見ゆる、雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て、我が身を驚き、あるは、昨日は榮えおこりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも、疎くなり、あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴のはねがきをかぞへ、あるは、吳竹のうきふしを人に云ひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、今は、ふじの山も、

以上の御時  
以下に普通  
本のなをし  
後文を  
以て挿入す

煙たゞずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ、心をなぐさめける。かの御世や、歌の心を去らしめしたりけん。かの御時に、おほきみつのくらゐ、柿本の人麻呂なん、歌のひじりなりける。これは、君も人も、身を合せたりと云ふなるべし。秋の夕、龍田川に流るゝ紅葉をはみかどの御目に錦と見給ひ、春のあした吉野山の櫻は、人麻呂が心には、雲かどのみなん覺えける。又山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくなへなりけり。人麻呂は、赤人が上に立たん事かたぐ、赤人は、人麻呂が下に立たん事かたくなむありける。此の人々をおきて、又すべれたる人も、吳竹のよゝに聞え、片糸のよりよりに絶えずぞありける。これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。かの御時よりこのかた年は百年あまり、世は十つぎになむなりける。こゝにい

上文錯亂  
してこ  
るならん

しへの事をも、歌の心をも去れる人、わづかにひとりふたりなりき。去かはあれど、これかれ得たる所得ぬ所、たがひになむある。かの御時よりこのかた年は百年あまり、世は十つぎになむなりける。いにしへのことをも、歌をも去れる人よむ人多からず。今、此の事を云ふに、官位高き人は、たやすき様なれはいれず。其の外に、近き世に、其の名聞えたる人は、すなはち、僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まこととすくなし。たどへは、畫にかける女を見て、徒らに心を動かすが如し。在原業平は、其の心あまりて、詞たらず。去ほめる花の色なくて、にほひ残れるが如し。文屋康秀は、詞たくみにて、其のさま身におはず。いはゞ、商人の、よき衣着たらんが如し。宇治山の喜撰は、詞かすかにして、はじめをばりたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の雲にあへるがごとし。よめる歌、おほくき



こえねは、かれこれをかよはして、よくまらず。小野小町は、いにしへのそとほり姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはゞよき女の、なやめる所あるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。大友黒主は……そのさまいやし。いはゞ薪負へる山人の、花の蔭にやすめるが如し。此の外の人々、其の名聞ゆる、野べにおふるかづらの、延ひ廣どり林に茂き木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて、其の様まらぬなるべし。かよるに、今すべらぎの、天の下まろしめす事、四の時、九かへりになむ成りぬる。あまねき御うつくしみの波、八島の外まで流れ、廣き御惠の蔭、筑波山の麓よりもまけくおはしまして、萬のまつりごとをきこしめす暇、もろくの事をすて給はぬあまりに、古の事も忘れじ。ふりにし事もおこし給ふとて、今も見そなはし、後の世にも傳はれ

とて、延喜五年、四月十八日に、大内記紀、友則、御書所、預紀、貫之、前甲斐、目凡河内、躬恒、右衛門、府生壬生、忠峯らに仰せられて、萬葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなん。それが中にも、梅をかさすよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又鶴龜につけて、君を思ひ、人をもいはひ、秋萩、夏草を見て妻をこひ、逢坂山に到りてたむけを祈り、あるは、春夏秋冬にもいらぬ、くさぐさの歌をなん撰はせ給ひける。すべて千歌二十卷、名づけて古今和歌集と云ふ。かく、このたび集め撰はれて、山志た水のたえず、濱のまさごの、數多くつものりぬれば、今はあすか川の、瀬になるうらみも聞えず。さゞれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。それ、まぐら言葉は春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋の夜の、長きをかこてれば、かつは、人の耳におそ

り、かつは歌の心にはち思へど、たなびく雲のたちる、啼く鹿の起  
きふしは、貫之らが、此の世に同じく生れて、この事の時にあへる  
きをなむよろこびぬる。人麿なくなりたれど、歌のよとゞまれる  
かな。たとひ時うつり、ことささり、樂しび悲しびゆきかふとも、此の  
歌もし青柳の糸絶えず、松の葉の散りうせずして、まさきのかつ  
ら、長く傳はり、鳥の跡、久しくとゞまらば、歌のさまをも去り、こと  
のこゝろを得たらん人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて  
今をこひざらめかも。

(二)大偃川行幸和歌序

此の文も醍醐天皇延喜七年九月、大偃川に行幸ありし日、群臣によましめ給へ  
る歌の序を、貫之朝臣におぼせて、書かしめられしなり。野々口隆正翁の説に、此  
の序は古今集序より、先立ちて出来たるか。そは古今の序にある、延喜五年四月

十八日は、此の集撰めと仰せたまへる時にて、撰みあげて奉りしは、延喜の末な  
りしと、集中に證多かりといへり。此の説真ならば、此の文をこそ、序文の嚆矢と  
はいふべけれ。

あはれ、我が君の御世長月の九日と、きのふいひて、残れる菊を惜  
み給ひ、又くれぬべき秋を惜み給はんとて、月の桂のこなた、春の  
梅津より御船よそひて、渡守をめして、夕月夜をぐらの山のほと  
り、行く水の大井の川邊に行幸し給へれば、久方の空には、たなび  
ける雲もなく、みゆきをまち、流るゝ水底には、濁れる塵なくて御  
心にぞ協へる。と詔して仰せ給ふ事は、秋の水に浮びては、流るゝ  
木の葉と過たれ、秋の山を見れば、織る人なき錦とおもほえ、紅葉  
のはの嵐にちりて、曇らぬ雨と聞こえ、菊の花の岸にのこれる、空  
なる星と驚き、霜の鶴河邊に立ちて、雲のおるゝかと疑はれ、ゆふ

べの猿、山のかひになきて、人の涙をおとし、旅の雁雲路にまどひ  
て玉章と見え、遊ぶかもめ水に栖みて、人になれたり。入江の松幾  
世経ぬらん、といふ事をぞよませ給ふ。我が筆短き心の、このもか  
のにもまどひ、つたなき言の葉、吹く風の空にみだれつゝ、草のは  
の露ととも、にうれしき涙落ち、岩浪と共に悦はしき心ぞ立ちか  
へる。もし此の言のは世の末まで残り、今をむかしにくらべて、後  
の今日を聞かん人、海人の栲繩くりかへし、志のふの草の、志のは  
さらめや

(三)庚申夜奉和歌序

この文は、庚申の夜歌會ありて、おのゝ物したるをあつめて、奉りたる由を源  
順朝臣の書けるなり。貫之が古今の序につぎて、めでたきものと云ひはやせり。  
源順は、村上、冷泉、圓融の諸朝に歴任し、むづかに能登守にて、終りし人なるが、和

歌に秀で、詩文をさへ巧にせり。

伊勢のいつきの宮、秋野の宮にわたり給ひて、後、冬の嵐さむくな  
りてのはじめ、はつかなぬかの夜をつくつゝ、とやはあかすべき。  
とおもほして、御簾のうち、にさぶらふおもと人、御はしのもとに  
まゐれるまうちぎみたちに、歌よませあそびし給ふ。歌の題にい  
はく、松、聲よるの琴に、いる。これにつきて聞けば、あしびきの山下  
風にひゞくなる、松のふかみどり、うは玉の夜半にきこゆること  
のおもしろさも、皆ひとつにみだれあひ、ゆきかよひて、うへもむ  
かしの、風松に、いるといふ、琴の志らべを、つくりおきつたへそめ  
けん。どなむおもほしける。順か、しらの髪、夏も冬も、わかぬ雪かど  
あやまたれ、心のやみは、からにもやまどにもすべてつきなく、御  
まへのやり水にうかべる、残りの菊におもひあはすれば、いづみ

はかりにまづめる身はつかしく、名にたかきぬがさ、をかに散  
るもみちはを見わたせば、かゝるまどるにさふらふことさへ、ま  
はゆけれど、さもあらはあれ。世の人こそ聞きてそまじりわらはめ。  
かけまくもかしこき御かみ、あはれとも恵みさいはひ給ひてん  
とて、今のいにしへを見るが如く、後の人も見よとて、かきまゐりし  
てたてまつるは、おほせごとくにまたがふなり。  
夜をさむみ、ことにしもいる松風は、

きみにひかれて、千世ぞふるらむ。

(四)高陽院行幸之時應制奉和歌序

此の文は、後一條天皇萬壽元年九月、皇太后上東門院と申すのおはします高陽  
院に、行幸ありし日、古岸菊久兼といふ題を賜はり、詠みて奉らしめたる歌の序  
にて、式部少輔文章博士内藏權頭善滋爲政の、かきて奉りしなり。爲政は、文章博

士保障の子にて世に善學士と稱せられき。

おほきさきの宮、天の下に三笠山といたゞかれたまひ、日の本に  
は、はゝき木と立ち榮えおはしましてより、ゆく末にたのもしき  
事、おほはらの千年を松の風に吹き傳へ、朝夕によろこほしきこ  
と、ありすがはひとたび澄める水の心のどけき世に、多くのまつ  
りごとを続べ行はせたまふ、左のおほいまうちぎみも、いもせの  
山の雲、へだてられぬ御なからひなり。こゝに百敷のひんがし、幾  
はくもさらざる程に、古よりすなれたる所に、あたらしき花のい  
らかをつくりつゞけ、玉のうてなをみがきなして、あやしき草木  
をほりうゑ、かどあるいはほ石をたてならべて、山をたゝみ、池を  
たゝしめ給へるを、御覽せさせ給はんとて、長月の十日やうか  
に、あからさまにわたらせ給へるが故に、わがすべらぎも、きのふ

みゆきせさせ給ひて、ひねもすに御遊びありて、あくる今日は、心のどかに、秋の空もくもりなく、夜半の月影もくまなく照らせり。今あまたの上達部殿上人参りつどひて、きしの菊久しくにほふといふことを題にて、和歌をたてまつらせ給ふ。此の事を書きまゐるさん事は爲政なめりと仰せ給はず。ことはの林もおい木になりて、花のおもひもわすれにけり。ことはの泉もあさくなりければ、人なみならぬ水さきを、あはれと覺しめして、あら玉の年立ちかへる春のあがためしに、かずまへとゞめ給へとしか申す。

(五)後拾遺和歌集序

後拾遺集は、白河天皇の承保二年に、權中納言藤原通俊勅命をうけたまはりて、撰集に着手せしが、公務に妨げられて、數年を経て、やうく應徳三年に至りて成りぬ。そもく古今集の後、歌集の勅撰二度に及ばれしかど、序といふものな

し。此の集よりぞ、又々序を加へしめられし。此の序は、通俊卿のかゝれしものにて、今より凡八百十餘年前なり。通俊卿は、小野宮、左大臣實賴公の末にて、從二位權中納言治部卿たりき。堀河天皇の康和元年に薨せし人とぞ。

我が君天の下まろしめしてよりこのかた、四の海浪の聲聞えず。九の國みつぎ物絶ゆる事なし。凡そ日のうち、よろづのことわざ多かる中に、花の春、月の秋、折につけ事、のぞみて、空しく過ぐしがたくなんおはします。これによりて、近くさふらひ遠く聞く人、月に嘲り風に欺く事絶えず。花を弄び鳥を憐ますと云ふ事なし。終におほんあそびのあまりに、志き島のやまと歌あつめさせ給ふ事あり。拾遺集に入らざる中頃のをかしき言の葉、もしほ草かきあつむべき由なんありける。仰せをうけたまはれる我れら朝にみことのをうけ給はり、夕に宣へ給ふ事、誠にまけし。此の仰せ心にかよりて思ひながら、年をおくる事、こゝのかへりの春

秋になりけり。いぬる應徳のはじめの年の夏、みな月の廿日餘りの比ほひ、八くらのつかさにそなはりて、五日の暇もさまたけなし。そのかみの仰せを、おいその森に思ひ給へて、ちりふなる言の葉かき出づる中に、いそのかみふりにたる事は、古今後撰拾遺集にのせて、一つも残らず。其の外の歌、秋の虫のさせるふしなく、芦間の船のさはり多かれど、中頃より此の方、今にいたるまでの歌の中に、とりもてあそぶべきもあり。天曆の末より今日に至るまで、世は十づぎあまり一つぎ、年は百とせあまりみそぢになん過ぎにける。住吉の松久しく、あらたまの年も過ぎて、濱の眞砂の敷えらぬまで、家々の言の葉多くつもりにけり。言を撰ぶ道、すべらぎのかしこきまわさどてもらさず。ほまれをとる時、山かつのいやしきこととて、もすつる事なし。すがた秋の月のほがらか

に、言葉春の花の匂ひあるをは、千歌二もうち十餘り八つを撰びて二十巻とせり。名つけて後拾遺和歌集と云ふ。凡そ古今後選二つの集に入りたる、ともがらの家集をは、世もあがり人もかまなくて、難波のよしあし定めん事も憚りあれば、これに除きたり。昔梨壺の五つの人といひて、歌にたくみなるものあり。いはゆる大中臣能宜、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等これなり。さきに歌のころをえて、吳竹のよゝに、池水のいひふるされたる人なり。これらの人の歌をさきとして、今の世のことを好むともがらに至るまで、目につき心にかなふをは入れたり。世にある人聞く事を、畏しとし見ることとを卑しとする諺によりて、近き世の歌に心をとゞめん事かたくなあるべき。まかはあれど、後見ん爲に、吉野川よしといひながさん人に、あふみのいさら川のいさゝかにこ

の集を撰べり。此の事けふにはじまれるにあらず。ならの帝は万葉集二十卷をえらびて、つねのもてあそびものと志給へり。かの集の心は、やすき事を隠して、かたき事を顯せり。そのかみの事、今の世にかなはずして、まどへる者多し。延喜の聖の帝は万葉集の外の歌二十卷を撰びて、世に傳へ給へり。いはゆる今の古今和歌集これなり。村上の畏とき御代には、又古今和歌集に入らざる歌二十卷を撰び出で、後撰集と名づく。又花山の法皇はさきの二つの集に入らざる歌をとり拾ひて、拾遺集と名づけ給へり。かの四つの集は、言葉はぬひ物の如くにて、心は海よりも深し。此の外大納言公任卿みそちあまり六つの歌人をぬき出で、これかれたへなる歌も、うちあまり五十をかきいだし、又十あまり五つがひの歌を合せて世に傳へたり。志かるのみにあらず。やまどもろ

こしのをかしきこと二卷を撰びて物につけ事によそへて人の心をゆかしむ。又九の志なのやまと歌を撰びて人にさとし、我が心にかなへる歌一卷を集めて、深き窓にかくす集といへり。今も古もすべれたる中にすべれたる歌をかき出して、こがねの玉の集となん名づけたる。其の言葉名にあらはれて、其の歌なさけ多し。おほよそ此の六くさの集は、かしこきがいやしきも、知れるも知らざるも、玉くしけあけくれの、心をやるなかだちとせずと云ふことなし。又近く能因法師と云ふものあり。心花の山の跡を願ひて、言葉人に志られたり。わが世にあひとしあひたる人の歌をえらびて、玄々集と名づけたり。これらの集にいらる歌は、海士のたぐ繩くりかへし、おなじことをぬきいづべきにもあらざれば、此の集にのする事なし。又うるはしき花の集といひ足引の山

伏が志わざと名づけ、うる木のもとの集といひあつめて言の葉  
 いやしく、姿だみたるものあり。これらの歌は誰が志わざとも志  
 らず。又歌のいでどころ詳ならず。たとへば山河の流を見て、水上  
 ゆかしく霧のうちの梢を望みて、いづれのうる木と知らざるが  
 如し。志かれは、これらの集にのせたる歌は、かならずしもさらず。  
 つちの中にこがねをとり、石の中に玉のまじはれる事あれば、さ  
 もありぬべき歌は所々のせたり。此の中にみづからの拙き言の  
 葉も、度々の仰せそむきがたくして、ばゞかりの關の憚りながら、  
 所々のせたる事あり。此の集もてやつすなかたちとなんあるべ  
 き。おほよそ此の外の歌、みくま野の浦のはまゆふ世を重ね、白浪  
 のうちきく事、鳴のはねがき書きあつめたる、色好みの家々にあ  
 れど、埋れ木の隠れて見ることかたし。今の撰べる心は、それ志か

にはあらず。身はかくれぬれど名は朽ちせぬものなれば、古も今  
 も情ある心はせき、ゆく末にも傳へん事を思ひて、撰べるならし。  
 志からずは、たへなる言の葉も、風の前にちりはて、光ある玉の言  
 葉も、露ととも消え失せなんことによりて、すがの根の長き秋  
 の夜、つくはねのつくくと、白糸の思ひ亂れつゝ、三年になりぬ  
 れは、同じきみつの年のくれの秋のいさよひの頃ほひ、撰びをは  
 りぬることになんありける。

◎日記文

日記と稱するものに二種あり。日々の事柄を記録したるものと、旅行中の記録、  
 即ち紀行との二つなり。そも日記は、序文などの如く、莊重謹嚴にかくべき  
 定も非ず。物語文の如く、綺麗艶曲にすどもあらず。云は、見聞のまゝ、あるは  
 思へるまゝを記すに止りて、散録漫筆の類なれば、文章は敢へて、彫琢したりと  
 も見えぬと、名家の筆ずさみは、さすがに趣味多かり。此の類の文にて、いと古き



は、土佐日記なると云ふも更なり。次ぎては、崎崎日記、紫式部日記、和泉式部日記、更科日記など、皆この時代に出來しものなり。

(一)土佐日記

此の日記は、紀貫之朝臣が醍醐天皇の延長八年、土佐の國守となりて赴任し、朱雀天皇の承平四年に、期滿ちて上京せられし時の、船路の紀行なり。當時日記といふもの、誰れも書けりと思ゆれど、皆漢文に物する習ひなりけむを、紀氏ひとり國文を以て、此の紀行を著はされしは、時流に超然たりし、卓識の程想ふべし。文牒は、紀氏戯れに、自<sup>多</sup>からを女になしてかきたれば、古今集序など、は全く異なりて、所々に諧謔を交へ、筆致輕快洒落にして、毫も刻苦の痕を留めず。此の後紀行を物する人、大かた本書の文に、倣ふ様にぞ成れりける。

首途の條

廿七日、大津より、浦戸をさしてこぎいづ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして、俄に失せにしかば、此の比の出で立

いそぎを見れど、何事もえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、悲しみてふる。ある人々もえたへず。此の間に、ある人の、かきていだせる歌。

みやこへと、思ふも物のかなしきは、

かへらぬ人の、あればなりけり。

またある時には、

あるものと、忘れつゝなほ、なき人を、

いづらとどふぞ、かなしかりける。

といひける間に、鹿兒の崎といふ所に、守のばらから、またこと人、これかれ酒などおひ來て、磯におりあて、別れがたきことをいふ。守のたちの人々の中に、このくる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく。かく別れがたきいひて、かの人々の、くちあみも、

るもちにて、このうみべにて、荷なひいだせるうた、

をしと思ふ、人やとまるとあしがもの、

うちむれてこそ、われは來にけれ。

といひてありければ、いといたくめで、ゆく人のよめりける、

棹させど、そこひまらぬわだつみの、

深きこゝろを、君に見るかな。

といふあひだに、かちどり、ものゝあはれもまらで、おのれし酒を  
くらひつれば、はやくいなんとて、まほみちぬ。風もふきぬべしと  
さわけは、舟にのりなんとす。此の折に、ある人々、折節につけて、か  
ら歌ども、時に似つかはしきをいふ。又ある人、西の國なれど、甲斐  
歌なごうたふ、かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆく  
雲も、たゞよひぬ。とぞいふなる、こよひ浦戸にとゞまる。

船中に若菜を得たる條

七日になりぬ。同じ湊にあり。けふは、青馬を思へどかひなし。たゞ  
波の白きぞ見ゆる。かゝるあひだに、人の家の池と名ある所より、  
鯉はなくてふなよりはじめて、川のも海のもの、ことものを、長櫃  
に荷ひつゞけておこせたり。若菜、こにいれて、雉子など花につけ  
たり。若菜ぞけふをまらせたる。歌あり。そのうた、

あさぢふの、野べにしあれば、水もなき、

いけにつみつる、若菜なりけり。

いとをかしかし。この池といふは、所の名なり。よき人の、男につき  
て下りて、住みけるなりけり。この長櫃の物は、皆人わらはままでに  
くれたれば、あきみちて、舟子どもは、はらつゞみをうちて、海をさ  
へおどろかして、波たてつべし。

舟子の唱歌を聞く條

宇多の松原をゆきす。其の松のかず、幾そはく、幾千年へたりと  
まらず。もどごに、浪うちよせ、枝ごに、鶴とびかふ。おもしろし  
と見るに、堪へずして、舟人のよめるうた、  
見わたせば、松のうれごに、すむ鶴は、

千とせどちとぞ、思ふべらなる。

とや。此の歌は、所を見るに、えまさらず。かくあるを見つゝ、こぎゆ  
くまに、山も海もみなく、夜ふけて、西東も見えずして、天け  
のと、かちどりの心に、まかせつ。そのこもならば、ぬは、いとも心ほ  
そし、まして、女は、ふなごに、かしらをつきあて、音をのみぞな  
く。かく思へど、舟子かちどりは、船歌うたひて、何ともおもへらず。  
そのうたふ歌、

春の野にて、ぞ、ねをはなく。我がすゝきにて、手をきるく、つん  
だる菜を、親やまほるらん。まうとめや食ふらん。かへらや。よん  
べのうなるもがな。錢こはん。夜への菜を、そらごを、して、おぎ  
のりわきをして、錢も特て來ず、已れたに、こず。  
これならず、多加れど、かゝず。これらを人の笑ふを、聞きて、海はあ  
るれど、心はすこしなきぬ。

住吉の濱にて風波にあふ條

五日、けふからくして、和泉の灘より、小津の泊をおふ。松原めもは  
るく、なり。かれこれ、苦しければ、よめる歌、  
ゆけどなほ、ゆきやられぬは、妹がうむ、

小津の浦なる、さしの松はら。

かくいひつゝ、來るほどに、船とくこけ。日のよきにと、催せば、楫取、

ふなごどもに云はく。みふねより、仰せたふなり。朝ぎたの、出で來ぬさきに、つなではやひけ。といふ。此の詞の、歌の様なるは、楫取の自つからの詞なり。楫取はうつたへに、我れ歌の様なる事、いふにもあらず。聞く人の、あやしく、歌めきて、もいへる哉とて、かき出せば、けに三十文字あまりなりけり。今日浪を立ちそと、人々ひねもすに祈る志るしありて、風浪たふす。いまし、かもめむれるて、遊ぶ所あり。京の近づくよろこびのあまりに、あるわらはのよめる、祈りくる、かぎまと思ふを、あやなくに、

かもめさへだに、浪とみゆらむ。

といひてゆく間に、石津といふ所の、松原おもしろくて、濱邊遠し。又住吉のわたりをこぎゆく。あるひとのよめる、  
今見てぞ身をほ志りぬる。住の江の、

松よりさきに、我はへにけり。

こゝにむかしつ人の母、ひと日かた時も、忘れねはよめる、

住の江に、舟さしよせてわすれ草、

志るしありやと、つみてゆくへく。

となん。うつたへに、忘れんとはあらで、戀しきこゝち志ほしやすめて、又もこふる、力にせんとなるべし。かくいひてながめつゝ來るあひだに、ゆくりなく風ふきて、たけどもく、志りへ志どきに志どきて、ほとくしくうちはめつべし。楫取のいはく。此の住吉の明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらん。とは今めくものか。さてぬさたてまつりたまへといふ。いふに志たがひて、ぬさたてまつる。かくたてまつれども、もはら風やまで、いや吹きにいや立ちに、風浪の危ふければ、楫取又いはく。ぬさには御心のゆ

かねは、御舟もゆかぬなり。猶うれしと思ひ給ふべきもの、たてまつりたまへ。といふ。又いふに、またがひて、いかばせんとて、まなこもこそ二つあれ。只一つある鏡をたてまつるとて、海にうちばめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる神の心を、あるし海に、

かゞみを入れて、かつ見つるかな。

いたく住の江のわすれ草、き志の姫松などいふ、神にはあらずかし。めもうつらく、かゞみに神の心をこそは見つれ。楫取のころは、神の御心なりけり。

(二)紫式部日記

此の書は、式部が夫に別れて後、上東門院の宮に仕へし頃、ほひ、女院の御懐胎の時より、御産の日の有様などを書き記して、折にふれ己が本意をもあかしたるものなり。されば文章は、さまで潤色もたたる所もなきまゝ、源氏物語の如くはあらぬど、さすがに簡淨にして、優美なり。且此の書は、たい文辭の美なるのみならず、著者の性質行状をも知るべき材料としても價あり。

秋の始め宮の御産まつ程の條

秋の氣はひのたつまゝに土御門殿の有様、いはんかたなくをか。し。池のわたりの木ずるども、やり水のほとりの草むら、おのがゑし色づきわたりに、おほかたの空も艶なるに、もてはやされて、不斷の御讀經のこゑも、あはれまさりけり。やうくすゞしき風のけしきにも、例のたえせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にもちかうさぶらふ人々、はかなき物語するを、聞

しめしつゝ惱ましうおはしますすべかめるを、さりけなくもてかくさせ給へり。御有様などのいとさらなる事なれど、うき世のなごさめには、かゝる御まへをこそ、たづね参るべかりけれど、うつし心きはひきたがへ、たとしへなく、よろつ忘るゝにも、かつはあやしき。まだ夜深きほどの月さしくもり。木の下をくらきに、御かうしまるりなはや。女官はいまださぶらはじ。藏人まるれ。などいひまろふほどに、後夜のかねうちおどろかし、五壇の御すほう、ときはじめつ。我もくゝとうちあけたる伴僧のこゑを遠く近く、聞きわたされたる程、おどろくしくたふとし。観音院の僧正、東の對より廿人の伴僧を率ゐて、御加持まゐり給ふあしおと、わたどのゝはしの、とゞろくゝとふみならさるゝさへぞ、ことゝの氣はひにはにぬ。法住寺の座主は、馬場のおとゞ、へんちじの僧都

は、ふどのなごにうちつれたる淨衣すかたにて、ゆるくしき、からはしどもをわたりつゝ、木の間をわけてかへりいるほども、はるかに見やらるゝ心地してあはれなり。さいさあざりも、大威徳を敬ひて、腰をかゞめたり。人々まゐりつれば、夜もあけぬ。わた殿の戸口のつぼねに見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身めして、やり水はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花の、いみじう盛りなるを、一枝折らせ給ひて、几丁のかみよりさしのぞかせ給へり。御さまのいと耻かしけなるに、我があさがほの思ひまらるれば、これ遅くてはわろからん。この給はするにことづけて、硯のもとによりぬ。

女郎花、さかりの色を見るからに、

露のわきける身こそまらるれ。

あなとよほよゑみて、硯めしいづ。

白露は、わきてもおかじ。をみなへし、

こころからにや、色のそむらん。

志めやかなる夕暮に、宰相の君とふたり物語してゐたるにどの  
うち。殿、三位の君すたれのつま引あけてゐ給ふ。としのほどよ  
りは、いとおとなしく心にくきさまして、人は猶こころはへこそ  
かたきものなめれ。など世の物語志めととして、おはする氣は  
ひを、稚しと人の侮り聞ゆるこそあしけれ。とはづかしけに見ゆ。  
うちとけぬ程にて、おほかるのべにとうちずんして、たち給ひに  
しさまこそ、物語にほめたるを、どここのこころちし侍りしか。かはか  
りのこと、うちおもひ出らるゝもあり。其の折は、をかしきこと  
の、すぎぬればわするゝも有るはいかなるぞ。

宿中に盗人入りたる條

志はすの廿九日に、始めて参りしも、こよひのことぞかし。いみじ  
くも夢路にまどはれじかな。と思ひ出づれば、こよなくたちなれ  
にけるも、うとましの身のほどやとおほゆ。夜いたうふけにけり。  
御物忌におはしましければ、おまへにもまゐらず。心ほそくてう  
ちふじたるに、前なる人々の、うちわたりは猶いとけはひことな  
りけり。さにては、今はねなまじものを、さもいさときくつ志  
けさかなと、色めかしくいひゐたるを聞きて、

年くれて、わが世ふけゆく風の音に、

心のうちの、すさまじきかな。

とぞひとりてたれし。つごもりの夜、追難いととくはてぬれば、齒  
ぐろめつけなど、ばかなきつくろひどもすとて、うちとけるたる

に辨の内侍きて、ものがたりして伏し給まへり。たくみのくら人は、なけしの志もにゐて、あてきがぬふものゝ、かさねひねり教へなど、つくづくと志るたるに、おまへの方に、いみじくのゝしる。ないしおこせとどみにも起きず。人の泣き騒ぐ音のきこゆるに、いとゆゝしく物も覺えず。火かと思へど、さにはあらず。たくみの君いざくどさきにおしたてゝ、ともかくも宮しもおほします。まづまゐりて見奉らんと、内侍をあらゝかにつきおどろかして、三人ふるふく、足もそらにて参りたれば、はだかなる人ぞふたりゐたる。鞆負、小兵部なりけり。かくなりけりと見るに、いよくむくつけし。みづし所の人も皆いで、宮のさぶらひも、瀧口も、なやらひはてけるまゝに、みなまかでゝけり。手をたゝきのゝ志れど、いらへする人もなし。おもものやどりの刀自を呼びいでたるに、殿

上に兵部丞と云ふ藏人、よべくと、はちもわすれて、くちづからいひたれば、尋ねけれど、まかではけり。つらきこと限りなし。式部丞すけなりぞまゐりて、どころづくのさし油ども、たゞひとりさしいれてありく。人々もの覺えず、むかひるたるもあり。うへより御つかひなどあり。いみじうおそろしうこそ侍しか。をさめ殿にある御ぞとりいでさせて、この人々に給ふ。ついたちのさうぞくは取らざりければ、さりゆもなくてあれど、はだかすがたは忘られず。おそろしきものから、をかしうともいはず。こといみも志あへず。

(三)更科日記

この書は、今を距る八百四十四年前、後冷泉天皇の末つかたにあたり、菅原道真



公六世の孫、右中辨菅原孝標の女の、記したるなり。記者は始め祐子内親王の女房たりきといふ。文才ありて、筆づかひ世の常ならず。さてこの書を更科日記と名付けしは、夫俊通の信濃守となりて、任國に赴き、歸京の後、ある夜甥某の尋ね來たりし時、月もいで、やみにくれたる、姨捨に、なにとてこよひたつねまつらんかの歌あり。更科は月に名たかきどころなれば、その歌などよりや此の名を負はせつらんと云ふ。

本書中の記事は、治安元年著者が父の孝標と共に、上總を立ちて、東海道を上京せし事より、着京後の事、又數年の後、孝標の常陸介になりて、任國へ下りし事、おぼろげながら、俊通に嫁して、仲俊を生みたる事、夫俊通の信濃守となりて赴任し、年經て上京したるに、病を得て身まかりし事なども、あらく見えたり。此の間、凡そ四十年近くに涉れり。始めは旅の日記にして、中半以下は、家の記に似たり。そも、本書は、錯亂極めて多かりと見えたるに、先哲の熟讀咀嚼したるものなきにや。從來をさく、是れらの辨説を聞かず。按ふに、本書は作者晩年に至り、往時の日記を基とし、思ひ出でたる事どもを、拾ひに書きたるものか。年

月日子の判然せざる、又三四年間一記事だになく過ぐるもあり。但し當時假名文の日記といふは、此の書のみならず、大やうかゝる牀なるは、名こそ日記と云へ。あながち日次の事を記さず、一事件の始末、或は思ひ出でしふし、を記すに止まるものかとも思はる。

足がら山を越ゆる條

足柄山といふは、四五日かねて、恐ろしげに、くらがりわたり、やうく入り立つ麓の程だに、空のけしき、はかしくも見えず。えもいはず、繁りわたりて、いと恐ろしげなり。麓に宿りたるに、月もなく、暗き夜の闇に、まどふやうなるに、あそび三人いづくよりともなく、出できたり。五十はかりなるひとり、二十はかりなる、十四五なるとあり。庵の前にからかさをさへせてすゑたり。をのことも火をともして、見れば、昔こぼれといひけんがまごといふ。髪い

と長く、額いとよくかゝりて、色白くきたなけなくて、さてもありぬべき下仕などにて、も有ぬべしなど、人々あはれがるに、聲すべて似るものなく、空に澄みのぼりて、めでたく歌をうたふ。人々いみじうあはれがりて、けちかくて、人々もてけうずるに、にしろにのあそびは、えかゝらじなどいふを聞きて、難波渡りにくらぶれば、とめでたう謠ひたり。見る目のいときたなけなきに、聲さへ似るものなく、うたひて、さばかりおそろしけなる山中に、立ちて行くを、人々あかず思ひて、皆なくを、をさな心地には、まして此のやどりを、たゝんをさへあかず覺ゆ。まだ曉より足柄を越ゆ。まいて山の中の恐ろしけなること、いはんかたなし。雲はあしの下にふまる。山のなからはかりの、木のもとのわづかなるに、あふひのたゞ三すぢはかりあるを、世はなれて、かゝる山中にしもおひ出で

けんよと、人々哀がる。水はその山に、三所流れたる、からうじてこえ出て、關山にとゞまりぬ。

清見が關より高師の濱にいたる條

清見が關は、片つ方は海なるに、關屋どもあまたありて、海までくぎぬききたり。煙あふにやあらん。清見が關の浪も高くなりぬべし。面白きと限りなし。田子の浦は浪高くて、船にてこぎめぐる。ぬまじりといふ所も、するくゝとすぎで、大井川といふわたりあり。水のせの常ならず、すりこなどを、こくて流したらんやうに、白き水はやく流れたり。いみじく煩ひいで、どほたふみにかゝる。さやの中山など、こえけん程も覺えず。いみじく苦しければ、天龍といふ河のつらに、かり屋つくりまうけたりければ、そこにて日頃すぐるほどにぞ、やうくおこたる。冬深くなりたれば、河風はけ

しくふきあけてたへがたく覺えけり。濱名のはしについたり。濱名の橋、下りし時は、黒木をわたしたりし、此の度は跡だに見えぬは、舟にて渡る。入江にわたし、橋なり。どの海は、いとみじく浪たかく、入江のいたづらある洲どもに、ともものもなく、松原のまける中より、浪のかへるも、色々の玉の様にみえ、誠に松の末より、浪はこゆるやうにみえて、いみじく面白し。夫より上は猪の鼻といふ坂の、えもいはずわびしきを登りぬれば、三河の國高師の濱といふ。

京に到り着きたる條

美濃の國なるさかひに、すのまたといふわたりして、野上といふ所につきぬ。中畧不破の關、あつみの山など越えて、近江の國おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり。みつさか山の麓に、よる

ひる、まふれあられ降りみだれて、日の光もさやかならず。いみじうものむづかし。そこを立ちて、犬上、神崎、やすくるもと、などいふ所々、何となくすぎぬ。みづうみのおもて、はるどとして、なでしま、ちくふ島などいふ所の、見えたるいとおもまろし。瀬田の橋、皆くづれて、わたりわづらふ。粟津にとまりて、十二月の二日京にいる。

◎草紙文

草子とは、冊子の字を、さうしと音便に唱へ、さて草子の字を、充て、書きかへしならむとの、舊説もあれど、然らず。草子は、草稿、草案などの草にて、唯かきたるままの、酒色もせざる由に、云へりと思はる。子とは、扇に扇子、金に金子など書ける例にて、たゞ添へたる造なるべし。後世の謂はゆる、隨筆また漫録即ち是れなり。扱草子文は、當時代には、其の類甚た稀にして、唯枕草子の一書あるのみなり。

枕草子

此の草子は、清少納言といへる、女性の著書なる事、誰れかは知らじ。清少納言は、當代の歌人として名高き、清原深養父の曾孫にて、元輔の子なり。少納言は本名は何と云ひしか。詳ならず。若き時、一條天皇の皇后宮、定子の御方に仕へ奉りしが、才學すぐれたりしかば、宮の御寵淺からず、朋友にも重んぜられて、内侍といふ高官にも、昇せらるべき由、帝に申す者ありし程なりしが、宮の御同胞なる伊周内大臣隆家中納言、犯せる罪ありて、配流せられければ、宮にも御落飾ありて、尼になり給ひ、其の後四年程を経て、崩じ給ひなどせしかば、少納言も時を失ひ、世に落ちぶれて、終りたる由なり。此の外、委しき事は傳はらず。

本書の中には、己が身の君寵を得て時めきし事、皇后宮の御方の、一時は、甚御威勢ありし事などを書き、又我が身の敏才にして、人を感ぜしめ、世に譽めはやされし事をもかきて、往時を志のぶ、述懐の詞も、所々に見えれば、本書はやゝ、晩年に近づきて、書きたるものならむ。

本書の文体は、謂はゆる一氣呵成の筆づかひ、其の名の如く、滑くして、輕快に亦

勢ひあり、天真の美は、才氣と共に、紙上に溢れて、躍如たり。試みに紫式部、日記と、此の草子とを讀み比べ見よ。一は沈着緻密の性見えて、一は豪放磊落の氣現はれたり。二女の氣象と人品とは、各自の著書によりて、推知するを得べし。

大進生昌に門の狭きをせむる條

大進なりまさか家に、みやの出でさせ給ふに、東のかどはよつあしになして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋のゐねはいりなんやとおもひて、かしらつきわろき人も、いたくもつくろはず、よせておるべきものと思ひあなづりたるに、びらうけの車などは、門ちひさければさばりてえいらねは、例の筵道まきておるゝに、いとにくゝはらだゝしけれどいかゞはせん。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るもねたし。御前に参りてありつるやう啓すれば、こゝにも人は見るまじくやは。などか

はさしもうちとけつる。と笑はせ給ふ。されど、それは皆目なれて侍れば、能く志たてし侍らんはしこそ、驚く人も侍らめ。さて、かはかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えは笑はんなどいふほどにしも、これ参らせんとて御硯などさしいる。いでいとわろくこそおはしけれ。なごてか、其の門せはく作りて、住み給ひけるぞといへば、笑ひて、家のほど身のほどにあはせて侍るなりといらふ。されど門のかぎりを高くつくりける人もきこゆるはといへば、あなおそろしとおどろきて、それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずは、うけ給はり志るべくも侍らざりけり。たましく此の道にまかりいりにければ、かうだに辨へられ侍りといふ。その御道もかしこからさめり。薙道敷きたれば、皆おちいりてさわぎつるはといへば、雨のふり侍れば、けにさも

侍らん。よし／＼又仰せかくべき事もぞ侍る。まかりたち侍りなんとていぬ。何事ぞ、生昌がいみじうおちつるはと問はせ給ふ。あらず。車のいらざりつること、いひ侍ると申しておりぬ。

同じつぼねにすむ若き人々などして、よろづの事も知らず、ねおたければ皆ねぬ。東の對の西のひさしかけてある北のさうじには、かけがねもなかりけるを、それもたづねず、家ぬしなれば、案内をよく志りてあけてけり。あやまう、かれはみたるものゝ聲にて、さぶらはんにはいかゞ、とあまたしび云ふ聲に、おどろきて見れば、几帳のうしろにたてたる燈臺の光りもあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすき／＼志きわさ夢にせぬものゝ家におはしましたりとて、むけに心にまかするなめり。とおもふもいとをかし。我がかたはらな

る人をおこして、かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるをといへば、かしらをもたけて見やりて、いみじう笑ふ。あれはたそ。けせうにといへば、あらず。家あるじ局あるじと、定め申すべきことの侍るなりといへば、門の事をこそ申しつれ。障子あけ給へとやはいふ。猶其の事申し侍らむ。そこにさぶらはんはいかにくといへば、いと見苦しき事、更にあおはせじとて笑ふ。めれば、若き人々おはしけりとして、引きたてゝいぬる後に笑ふ事いみじ。あけぬとやらはたゞまづ入りぬかし。消息をするに、よかなりとは、誰れかはいはんと、けにかしきに、つとめて御前に参りて啓すれば、さる事もきこえざりつるを、よべのことゆめ、入りたりけるなめり。あはれ、あれをばしたなくいひけんこそ、いとほしけれど笑はせたまふ。

## 木の花は

梅の濃くも薄くも、紅梅、櫻の花びら多きに、葉色ときが、枝細くて咲きたる、藤の花志なひ長く、色よく咲きたるいとめでたし。卯の花は品劣りて何となけれど、咲く此のをかしう、ほとゝぎすの、陰に隠るらんとをかじ。祭の歸さに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根など、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に、白きひとへがさねかづきたる、青くち葉などにかよひていとをかじ。四月のつごもり、五月のついたちなどの頃ほひ、橘の葉のいと濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨のふりたるつとめてなどは、よになく心あるさまにかし。花の中より、みのがねの玉かど見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にも劣らず。郭公のよすがとさへ思へばにや。猶

更にいふべきにもあらず。梨の花よにすさまじくあやしき物にして、目に近くはかなき文つけたにせず、あいぎやうおくれたる人の顔など見ては、たとひに云ふも、けに其の色よりまて、あいなく見ゆるを、もろこしに、限りなき物にして、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ心もどなくつきためれ。楊貴妃、みかどの御使に逢ひて、泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨をおびたり。などいひたるは、おぼろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は、類ひあらじとおぼえたり。桐の花、紫に咲きたるは、猶をかしきを、葉のひろごりさまうたてあれども、又こと木どもと、ひとしういふべきに、あらず。もろこしに、ことごとしき名つきたる鳥の、これにも住むらん、心ことなり。まして琴につくりて、さまざまなるねの

出でくるなどをかしたは世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまぞにくけなれど、あふちの花いどをかし。かれ花にさまことばにさまきて、かならず五月五日にあふもをかし。

草の菴を誰れが尋ねんと答へし條

頭、中將の、そゞろなるそらごを聞き、いみじういひおとし、なにしに人と思ひけんなど、殿上にていみじくなんの給ふときくに、耻かしけれど、まことならはこそあらめ。おのづから聞きなほし給ひてん。など笑ひてあるに、黒戸のかたへなどわたるにも、聲などする折は、袖をふたぎて露見おこせず。いみじうにくみ給ふを、どかくもいはず、見もいれで過らす。二月つごもりがた、雨いみじうふりて、つれづれなるに、御物忌にこもりて、さすがにさう

さうしくこそあれ。物やいひにやらまし、どなんの給ふ。ど人々語れど、よにあらじなどいらへてあるに、一日志もに暮らして参りたれば、夜のおどゞにいらせ給ひにけり。なけしの下に火近くとりよせて、さし集ひて、へんをぞつく。あな嬉しや。どくおはせなど見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのほりつらんどおぼえて、すびつのもとに居たれば、又そこにあつまりて、物などいふに、何がしさふらふど、いとばなやかに云ふ。あやしきいつの間、何事のあるぞと問はすれば、殿守づかさなり。たゞこゝに人づてならで申すべきことなんといへば、さし出でよとふに、これ頭、中將殿のたてまつらせ給ふ。御かへりどくと云ふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんと思へど、たゞ今いそぎ見るべきにあらねば、いね。いま聞こえんとて、ふどころにひき入れて

いりぬ。猶人の物いふを聞きなどするにすなはち立ちかへりて、さらば其のありつる文を、給はりて。どなんおほせられつる。どくくといふに、あやしき伊勢物語なるやとて見れば、青き薄やうに、いときよけに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。蘭省、花時錦帳、下と書きて、末はいかにくどあるを、いかゞはすべからん。御前のおはしまさは、御覽せさすべきを、これが未知りがほに、たゞくしき、まんなに書きたらんも見ゆるし。なご思ひ廻はすほどもなく、せめまごはせは、唯そのおくに、すびつの消えたる炭のあるして、草のいほりを誰れかたづねん。ど書きつけてとらせつれど、返事もいはで、皆ねて、つとめていとどく、つほねにおりたれば、源中將のこゑして、草の庵やあるくくと、おどろく。さう問へば、なごてか。さ人けなきものはあらん。玉の



臺もどめたまはましかは、出できこえてましといふ。あなうれし。志もにありけるよ。上まで尋ねんとしつる物をとて、よべありしやう頭、中將のどのる所にて、すこし人々志きかぎり、六位まであつまりて、萬の人のうへ、昔今と語りていひしついでに、猶此の者むけに絶えはて、後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づるともやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず。つれなきがいとねたきを、こよひあしともよしとも、定めきりてやみなんかしとて、皆云ひ合はせたりし事を、只今は見るまじきとて、入り給ひぬとて、殿守づかさ來たりしを、又おひかへして、唯、袖をとらへて、どうさいをさせず、こひとりもて來ずは、文をかへしとれといましめて、さはかりふる雨のさかりにやりたるに、いとよく歸り來たり、これとてさし出たるが、ありつる文なれば、返してけるか。どうち見

るに、あはせておめけは、あやし。いかなる事ぞとて、皆よりて見るに、いみじきぬす人かな。猶えこそ捨つまじけれと見さわぎて、これがもどつけてやらん、源中將つけよなど云ふ、夜ふくるまで、つけわづらひてなんやみにし。此の事、必、語り傳ふべき事なりとなん定めしと、いみじくかたはらいたきまでいひきかせて、御名は、今は草の庵となんつけたるとて、いそぎたち給ひぬれば、いとわろき名の、末まであらんこそ、くちをしかるべけれ。といふほどに、修理、亮則光、いみじきよろこび申しに上にやとて、参りたりつると云へは、なぞ。つかさめしありともきこえぬに、何になり給へるぞといへは、いで、まことに嬉しき事の、よべ侍りしを、心もどなく思ひわかしてなん。かはかりめんほくある事なかりきとて、はじめ、ありけることども、中將のかたりつる、おなじ事どもをいひて、

此の返りごとにはまたがひて、さるものありとたにおもはじと、頭中將の給ひしに、たゞにきたりしは中々よかりき。もて來たりしたびは、いかならんとむねつぶれて、誠にわるからんは、せうどの爲もわるかるべしと思ひしに、なめだにあらず。そこらの人の譽め感じて、せうとこそきけとの給ひしかば、また心にはいとうれしけれど、さやうのかたには、更にえさふらふまじき身になん侍ると申しよかば、ことくはへ聞き知れどにはあらず。たゞ人にかたれとてきかするぞ。どの給ひしなん、すこしくちをしき、せうどのおぼえに侍しかど、これがもどつけ試みるに、いふべきやうなし、ことに又これが返しをやすべきなどいひあはせ、わるき事いひては、中々ねたかるべしとて、夜中までなむおはせし。これは身の爲にも、人の爲にも、さていみじきよることびには侍らずや。

司召にせうくのつかさ得て侍らんは、なにとも思ふまじくなるといへば、ゆにあまたして、さる事あらんとも志らで、ねたくもありけるかな。これになんむねつぶれておぼゆる。

このきみと秀句せし條  
五月はかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさふらひ給ふ。どこるよ、志て云へば、出でよ見よ。例ならずいふは誰ぞ。と仰せらるれば、出でよ、こは誰ぞ。おどろく、志う、きはやかなるはと、いふに、物もいはず、みすをもたけて、そよるとさし入るよは、吳竹の枝なりけり。おい、此の君にこそといひたるを聞きて、いさや。これ殿上にゆきて語らんとて、中將、新中將、六位どもなどありけるは、往ぬ。頭、弁はどまり給ひて、あやましく往ぬる者どもかな。おまへの竹を折りで歌よまんと、志つるを、職にまゐりて、同じくは女房など呼

ひ出でよをど、いひて來つるを、吳竹の名をいと疾くいばれて、いぬることをかしけれ。誰がをしへを知りて、人のなべて志るべくもあらぬ事をはいふぞ。なごのたまへは、竹の名とも知らぬものを、なまねたしとやおぼしつらんといへは、まことぞ。えまらじなごの給ふ。まめでとなどいひあはせて居給へるに、此の君と稱すといふ詩を誦じて、又集り來たれば、殿上にて言ひ期しつるほいもなくば、なごかへり給ひぬるぞ。いとあやましくこそありつれど、の給へは、さる事には何のいらへをかせん。いとなか／＼ならん。殿上にていひのよ志りつれば、上もきこしめして興せさせ給ひつると語る。弁もろともにかへすと／＼同じことをずんじて、いとをかしがれば、人々いでよ見る、とり／＼に物どもいひかはしてかへるとて、猶同じことを、もろごるにずんじて、左衛門の陣

に入るまで聞こゆ。つとめていとよく、少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、此のことを啓したれば、志もなる召して、さる事やありし。と問はせ給へは、知らず。何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らん。と申せば、とりなすとてもと、打ちゑませ給へり。誰れがことをも、殿上人ほめけりと聞かせ給ふをば、さいはるよ人をよろこはせ給ふもをかし。

名おそろしきもの

あをぶち、谷のほら、はたいた、くろがね、つちくれ、いかづちは名のみならず、いみじうおそろし。はやち、ふさうらも、ひこぼし、おほかみ、うしはさめ、らう、ろうのをさ、いにすし、それも名のみならず見るもおそろし。なほむしろ、強盜、又よろづに恐ろし、ひぢかさ雨、くちなはいちご、いぎす魂

おにどころ、おにわらび、うはら、からたち、いりずみ、ぼ  
うたん、うしおに、

見るにことなることなき物の文字にかきて、ことごとしき  
もの、

いちご、つゆ草、水ぶき、くるみ、もんぢやうはかせ、皇后  
宮の權大夫、やまもよ、いたどりはまして、虎の杖とかきたる  
とか。つるなくともありぬべき顔つきを、

むづかしけなる物

ぬひものうら、猫の耳のうち、鼠のいまだ毛もおひぬを、す  
のうちよりあまたまるはし出でたる、裏またつかぬかはぎぬ  
のぬひめ、ことばきよけならぬ所のくらき、ことなる事なき  
人の、ちひさき子どもなどあまたもちてあつかひたる、いと深

うしも心ざしなき女の、心地あしうまて、久まくなやみたるも、男  
の心の中には、むづかしけなるべし。

◎史傳文

上古の世に出来たる國史の中にて、古事記のみは、國文にかゝられたれども、日本  
書紀は純然たる漢文なりき。當時の勢ひ、公式だちたるものは、總じて漢文にか  
かれし由は、まば／＼上に述べたり。凡そ國史は、國語を以て記さしければ、眞を得  
る事能はざれど、假名のなかりし頃は、漢文に記すかた、中々に便利なりけらし。  
然れども、既に假名の便を知りたる、當時代に至りても、猶前例を逐ひ、時勢に靡  
きて、皆漢文にかゝれしは、いかにぞや飽かぬ心地す。そが上に、醍醐天皇の時よ  
り、國史官修の擧廢れ果てしは、いとい口惜しき限りなるが、其の後、私に、史傳の  
文かくものぞ出来にける。此の史傳こそ、國文にはかゝられたれ。  
是れより先、假作物語(即ち小説)多く世に現はれて、其れは讀者を娛ましむべく、  
趣向を新奇にし、文辭を綺麗にしたるからに、盛にもてはやされしかば、其の躰